たのが、啻に之れの行はざれざるのみならず、何となく、政府に抑制を加へる事が、非常に癪に障つて、果は　朝鮮政府よりも、日本政府の方が、憎くなつて來たので、當路者の失政を、算へ立て、さかんに痛罵を、加へるやうになる、と、政府は、更に又た、之れを抑制けにかゝる。此に於て、その間隔が、漸々遠くなつて　互に意思の疏通を、缺いた結果、芝居で演る、暗闘のやうな事が始まる。議論の行はれない、連中が、自然と、集まつて來て、所謂、不平黨なるものが出來る。勢ひ斯うなつては、征韓論ばかりでなく、何でも、政府の爲る事は、氣に容らない、といつた調子で、衝突つてゆくから、政府は、其連中を、遠ざけるやうになり、之れが長じて來るから、世間も騒がしくなつて來る。

外務大丞といふ、立派な肩書で、樺太境界談判委員を勤めた、丸山作樂と、いふ人があつた。自分の意見が、行はれない所から、職を辭して、民間へ下り、不平に、日を送つて居るうちに、征韓論が、熱を有つて來た。樺太の問題に、不平を抱いて居るものが、この議論に轉ずるのは、固より當然の事で、また、之れ位ゐに、都合のよい問題はない。丸山は、征韓論に依つて、多年の欝懐を晴さう、といふ事に、はやくも覺悟を決めた。

この時分から、世間が、騒々しくなつて來て、大學南校の教師が、二人までも傷けられた。いづれも英吉利人であるが、維新前から、持越の攘夷論が、此に再び、頭を上げかけたのであつた。間もなく、參議、廣澤兵介が、暗殺された。加害者が不分明いから、判然は言へないが、思ふに、征韓論の響きも、あつたのであらう。

白茅と、作樂の間に、幾たびか往復があつて、今は、作樂も、全く征韓黨の、一人となつた。作樂は、非常な國學者で、この事件から入獄して、同室者をして、皆な大和言を、使はせるやうにしたほどで、極めて熱誠の人であつたから、白茅との談合は、存外に、深い所まで、立入つて居た。

征韓の事は、第二として、先づ政府を叩潰せ、といふ一派が、之れに加はつて來た。その重立つものを、擧げて見ると。

富永　有隣（長　州）　大樂源太郎（長　州）
高田源兵衞（熊　本）　靜野　拙三（小　倉）
富永、古松は、憂世の學者であつた。大樂は、長州人の間にも、悪くいふものは多いが、それほどに、平凡ぬ奴でも、なかつたらしい。初岡は、此うちでの智囊であつた、といふ。岡崎は、後に羽田と改めて、世と隔てられたが、一種の傑物であつた。小河、高田、靜野等は、いづれも、特長のある、俊れた人物であつた。

（高田は、川上彦齋の事である。作久間象山を、斬つたのは此人だ）

然るに、公卿のうちからも、不平黨が、出て來た。之れは、江戸を皇都とし、東京と改稱して、畏れ多くも　陛下を迎へ奉りたるは、甚だ以つて怪しからん、といふのであつた。それといふのも、薩長の跋扈を、恣まに爲せるからである。宜しく先づ、薩長の權力を殺いで、皇都を、西京へ引戻し、車駕を迎へて、新政府を建てよう、といふのであつた。征韓論に、關係は遠く、事件の別であつても、反政府の目的に、變りはなかつたのである。

小河　眞文（久留米）　古松　簡二（久留米）
初岡　敬二（秋　田）　岡崎　恭輔（土　州）

六

皇都を、江戸へ移したといふ事について、不平を抱くものは、啻に一人の、愛宕卿ばかりではなく、苟も公卿として之れを喜ぶものはなかつた。また、薩長の跋扈は、誰れも左樣、感じて居るので、この二つを理由として、不平黨を糾合したら、必ず相當の活動は、出來たに違ひない。併し、不平の原因が、違ふものばかり集る、と、何うしても運動が別々になつて、それが爲めに、統一を缺いて、勢力は、存外に弱くなるのであつた。殊に、集つて來るものが、所謂、亂世の雄であるから、却々、他の言ふ事に從ふ連中でない。各自に思慮があつて、それの爲めに働くのであるから、單に政府へ對して、不平がある、とのみで、自然についた聯絡が、長く秩序ある、關係となる可き筈がなく、

先づ、大樂源太郎の一派が、單獨の働きを始めて、大村益二郎を暗殺し、引續いて、長州の動亂を惹起し、終に破れて、復た起つ能はず、遠く久留米に走つて、藩主の有馬頼咸を說いて、再擧に、腐心して居る、と、東京では、岡崎恭輔が、愛宕卿を說落して、愈々決心を爲せ、兩人が相携へて、澤宣嘉卿を、說きに行つた。澤卿は、比較的順境に、居た人であるが、それでも、薩長の專權には、頗る不平を抱いて居たのだ。折柄の相談であつたから、之れも、容易に同意した、といふやうな次第で、思ひの外、同志の糾合には苦まなかつた。從つて、何事も運びがよく、擧兵の準備にも、徐々、手をつけるほどであつた。

然るに、折角の計畫も、頗る滑稽な失策から、大破綻を來した。それは、如何なる次第か、といふに、有馬侯が、大樂一派に說かれ、その他からも、種々の勸說があつて、心が、漸く動いて來た。上京したのを幸ひとして、石州津和野の藩主、龜井侯に、逢ふた時、秘密の一端を漏らして、その同意を求めた。龜井侯にも幾分の不平はあり、殿樣了見から、割出された野心もあつた。藩臣の福羽文三郎（後の美靜）を呼んで、この事を相談した。福羽は、一寸法師に均しき、不具者ではあつたが、夙に勤王の大義を唱へて、京攝の間に出沒し、一たびは過激なる、討幕浪士の仲間にもはいつて、津和野藩の名をして、多少の光輝を、有たせたほどの人物で、その時代から、長州の桂小五郎（木戸孝允）とは、刎頸の交りを、して居たのだ。されば、福羽は、藩主の話を聞く、と、非常に驚いて、堅く其同意を拒んだ。のみならず、藩主にも、手强き異見を加へて、すぐに木戸の許へ、かけつけた。

木戸も、之れを聞いた時は、實に驚いた。この調子では、連累が、那の邊にまで、及んで居るか、解らないと思つた。事を荒立てずに、片端からボツ〳〵、毀して行くに限る、と、其處は、智者丈けに、巧い事を考へて、その夜、ひそかに澤卿を招いた。

『卿は、文久の昔を、忘れましたか』

この不意の質問に、澤も、些さか狼狽して、

『彼の時の事ばかりは、忘れませぬ』

『然らば、長州に、何の怨が、ありますか』

『エツ……』

『その後も、我等が、卿に盡した事は、よも知らぬとは、言へますまい』

言語は優しいが、顏色は惡い。眼も、異樣に輝いて居た。澤は默つて、頭を下げて居るばかりで、何の答辯もなかつた。

『今日に及んで、何事の不平がありますか、不平があるならば、何故、我等に仰せられませぬか、實に怪しからぬ事です』

澤卿は、顏の色も變つて、

『イヤ、私が、皆な惡い』

澤は、木戸の前に、事實を打明けて、脆くも、謝罪して仕舞つた。

この時は、丸山と佐田の征韓策も、歩を進めて、吉田健三の仲介で、橫濱の英一番館より、汽船購入の、約束も出來たし、獨逸人からは、二十萬兩借入の、約束も出來た。政府の力を借りず、之れを以つて、獨力、征韓の實を擧げるといふのであつた。

政府は、此に於て、もはや容赦はならぬ、とあつて、各派を通じ不穩の計畫あるものを、片端から引捕へて、入牢させて仕舞つた。之れが、明治四年の十二月三日の事であつた。

修交使派遣論と岩倉一行の歸朝

一

韓國の開闢時代は、深く知る事を得ないが、馬韓、辰韓、辨韓の、三韓時代を經て、百濟、高麗、新羅の三國時代に、なる頃から、我國との關係が、追々、密接になつて來た。高麗王の王建、といふ人が、三國を統一して、高麗王朝なるものが、茲に開けて、その間、殆んど二千五百年とあるから、隋分、古い方では、東洋でも、權勢が利く。それから、高麗王朝が倒れて、李氏の王朝が、新たに生れた。之れが、近代の朝鮮王家の、起因であつた。

李氏の、王朝を起した、太祖康獻王は、諱を李成珪と言ふて、之れは却々、非凡の人物であつた。この王が、三國を統一して、國號を朝鮮と、いふ事に定めた。日露戰爭の當時、國王であつた李熙は、卽ち此太祖の後裔である。李氏の天下と、なつてからは、年を經ること、僅に五百年であつた。

李熙が、王位に卽いた時は、他の國に、餘り類の少くない、珍說があつた。

朝鮮の曆でいふと、開國四百七十二年とあるから、我國の文久三年に當る。この歲に、哲宗といふ國王が、病死した。所が、世子の無い爲めに、朝廷內は、非常の混亂を極めて、派を樹て、黨を組み、頻りに自派の都合のみ考へて、新帝を得よう、としたから、酷い暗鬪が始まつた。哲宗の妃が、金氏であつて、金氏の一族が、朝廷を堅めて居るので、是非、之れを續けて、權力を保ち度い、といふ上から、金氏に、由緣深き、王族のうちから、新帝を擧げよう、

と爲る。それを、哲宗の前の、憲宗王の妃、洪氏の一派が、頻りに邪魔を入れて、洪氏の勢力と、なる可き、王族を、彼れか此れか、と、その詮議に、日を暮らす、といふ有樣であつた。

然るに、憲宗の前の、翼宗王の妃に、趙氏と云ふのがあつて、婦人でこそあれ、贈略の俊れた、凄い手腕があつた。この趙氏が、密かに金氏と、洪氏の爭ひを窺ふて、乘ず可きの機會を、待つて居たのだ。

金氏と洪氏は、互に睨み合の態で、部下の野心家が、見苦しい暗鬪をつゞけて居る。それを見て、趙氏は、頗る喜んだ。その爭ひが、日を逐ふて、烈しくなるに連れて、洪氏の勢力が、遠く金氏に及ばぬ、といふ事が、分明つて來た。洪氏は必死になつて、金氏に衝るけれども、金氏は、泰然として動かない。洪氏は、頻りに焦つて、金氏を壓へやう、と爲るが、到底、及びさうもない。其處で、趙氏は、洪氏を、巧く說きつけて、此に全く聯合が成つて、金氏に、衝る事になつた。

爭ひの永引くは、金氏の利益であるから、之れを疾く決するのが、洪氏の利益になる譯だ。趙氏の意見で、興宣君の子、李熙を立てよう、といふ事になつて、之れを朝議にかけた。金氏一派の驚きは、尋常でない。洪氏の推したものが、王位に卽けば、洪氏の勢力になる。そんな事は許せない、といふので、金氏の一派は、擧つて、反對する事になつた。尤も、反對するには口實があつた。それは、何ういふ事か、といふに、太祖李成珪が、遺した王憲に、生父あるものは、國王となる事を得ない、とある。李熙には、興宣君といふ、立派な生父があるのだから、之れを推立る事になる、と、代々の王憲に、背く事になるのだ。金氏は、之れを楯として、さかんに李熙の、排斥にかゝつた。

洪氏の陰にかくれて、趙氏は、爭ひの潮合を、見て居るのだ。時分は好しと、見て取つたから、洪氏をして、李熙を擁立して、國王となす旨の、公表を爲せ、それと同時に、宮中から、李熙の許へ、迎ひを出す、といふ事にして、內外の掛引、その他、一切の仕組が、悉皆出來て居た。

李熙の外に、適當のものがない、といふ事は、金氏が、胸を苦める所であつた。金氏には、策士が從いて居たもの

か、疾くも大勢を見て、突然、金氏の方から、李熙を擁立する旨の、教書を發表した。之れには、洗石の趙氏も、施す術がなく、些か閉口の體であつた。

一

金氏の一派に、計畫の裏を掬はれて、洪氏の驚きは、非常であつた。趙氏も、同じ驚きではあつたが、贍略機智に富んだ、趙氏の事であるから、左迄には失望もせず、胸中に、何等かの成算、あるものゝ如く、只だ金氏の爲すに、任せて置いた。

將さに擁立されんとする、李熙の父、興宣君は、李昰應と、名乘る人で、之れが卽ち、日本人の知る、大院君であつた。國王の父は、皆な大院君であるが、日本へ迄、響いた大院君は、この人ばかりである。贍力も、學問も、智慧もあつて、それで皇族の一人だ、といふのだから、實に凄いものだ。

任俠の氣風に強く、復讐心を加味して、豪傑肌の人であつた。財を散じて、客を迎へるので、何時も、其邸内には浪人が集まつて、置酒高談に、夜を徹する、といふ有樣であつた。從つて、生活費には、苦んで居たが、そんな事には無頓着な、興宣君、宛で梁山泊のやうな狀態で、その日を送つて居るうちに、遂々、窮迫の極に陷つて、京城を、夜逃げ爲る事になつた。

舞臺が、朝鮮丈けに、面白い。王族の夜逃げ抔は、容易に、他國では見られない事だ。開城府へ來て、家は構へて見たが、別に之れといふて、決まつた商賣がないのだから、すぐに米櫃が、ガタツクといふ始末で、興宣君も、今は進退谷まつた。所へ、京城から、跡を慕ふて來た、乾兒等が、見るに見兼ねて、土地の博徒に渡りをつけて、その歩合を、收めさせる事にした。それから、色々な事件を引受けて、報酬を得る事も始めた。之れが爲めに、先づ饑渴は免れたが、こんな風で、星霜を送つて居る、と、意外千萬にも、京城から、使者が來て、その子李熙を、以て、新帝

に拜する、といふのであつた。

並大抵のものならば、直ぐに二つ返辭で、李熙を、渡して仕舞ふだらうが、興宣君は、却々、そんな意氣地なしではなかつた。

『李熙を、新帝に迎へてくれるのは、まことに有難いが、己れは、何ういふ事になるのだ。王憲を破つても、己れを大院君と爲るか、それは全體、何うなるのか。それが定まらぬうちは、引受ける譯にはならぬ』

と、言はれたので、使者も、之れには閉口して、京城の方へ、急使を以て照會するやら、朝廷では、是非の議論が沸騰するやら、擦つた揉んだの結果が、終に之れをも容れる事になつて、愈々、李熙を迎へる事は、決定したのであつた。

斯くて、李熙は、京城へ、乘込んで來た。假令、子供でも、新帝になられる御方が來るのであるから、宮廷へ、着かせられた時は、一同の朝臣が、玄關まで出迎へた。折柄、例の趙氏は、次室に、控へて居たのだ。李熙が、室の前へ來られるのを見るや、突然に、駈け出して、李熙の手を採つた。朝臣が、呆れて見て居る、と、

『殿下には、よくこそ御承知下された。殿下は、妾の愛兒でありますから、之れよりは何事も、妾に、仰せ下されませ』

婦女でこそあれ、趙氏は、金氏の一派に、計畫の裏を掬はれた、と見せて、却て亦、その裏を掬つたのだ。自ら李熙を抱いて、內殿へ、はいつた後ち、朝臣を、前に列べて、

『今日より、李熙殿下を、新帝となす故、左樣心得ろ』

と、申渡しを爲る。

『それに就ては、新帝、猶ほ幼冲に、渡らせられる故、萬事は、妾が國母として、垂簾の裡に、政治を聽く事に致す』

と、大膽に、宣言して仕舞つた。

事は、終に之れで決まつた。

李熙は哲宗の嗣子でなく、翼宗の嗣子といふ、事になつた。賴朝の政子も豪かつたが、趙氏には、遠く及ばない。國は朝鮮でも、婦女として、斯うした豪いものも居た。興宣君も、引續いて參內する。金氏の一派を退けて、此に新たなる、內閣が組織された。興宣君は、大院君として、更めて攝政の役についた。大院君の本領は、之れから發揮されるのだ。

三

大院君が、攝政になる、と同時に、一大工事を起した。それが有名なる、景福宮の再建であつた。

抑も、景福宮と申す御殿は、今代から、五百年も前に、出來たものだ。太祖、康獻王以來、二百年餘りの王宮として、結構雄大、加ふるに輪奐の美を極めたもので、東洋屈指の大建築物であつた。然るに、豐臣秀吉が攻込んだ、壬辰の役に、兵火の爲め全燒した。その後、幾たびか再建を企てたが、何時も、不祥の事があつて、竣成しなかつた。

併し、國民は、上下共に、之れを惜んで、機會さへあれば再建しよう、といふの覺悟はあつた。大院君も、自分の愛子が、國王になつたのであるから、是非、この再建はしたい、といふ考へで、其道の名匠を集めて、設計を爲せるやら、繪圖を引かせるやら、種々に、手を盡して、さア着手しよう、となると、普請の金が出來ない。之れには、大院君も、一時閉口したが、忽ち一つの、方法を案出して、全國から、建築用の物資を、獻納させる事にした。それは郡守に命じて、家毎に命令するのであつた。

『貴樣の家は、財產が、何の位あるから、之れ丈けのものを、獻納しろ』

と、いつたやうな調子で、政府の威光で、ドン〳〵强請執行を爲るのだ。若し拒むものがあれば、郡衙へ、引出して責めつけるから、皆な慄へ上つて、御沙汰通りに爲る。材木だとか、石だとか、いふものは、之れで餘るほど集つた。

それから實際、之れに應ずる事の出來ぬ、無資力者に對しては、勞役を申し付けたのである。峻嚴なる、手段を以つて、迫つたから、大院君の、見込みの通りに、物資も集まれば、人間も充分であるから、彌々、建築に着手つた。然るに、棟木の組立も出來て、その祝ひが濟んだ晩に、普請小屋から、火事が始まつて、折角の苦心も煙となつて、消えて仕舞つた。

之れが、八道の人民に知れる、と、澁い顏をして、

『餘り慘酷ことを爲るから、左樣いふ災禍が起るのだ。放火でもなければ、失火でもなく、之れは全く、天火である』

と言ふて、囁けつた。

何事につけても、負ける事の嫌ひであつた、大院君は、これほどの大工事を、中止するやうな事はなく、再び建築に、着手る事にした。

大院君は、非常手段を以て、第二の徵發を始めた。その方法は、前の時と大差はないが、徵發の仕方は、數倍の峻烈を極めた。この時は、八道の墓石まで搬出させたほどだから、その他の事は、推量し得る。

地方一揆も、各所に起つたが、兵を差向けて、ドン〳〵片付けて仕舞ふ。叛いたもの丶家產は官沒して、建築費に爲る、といふやうな次第で、遂々、景福宮は、出來上つた。

大院君の、峻烈な性質は、啻だに國民に對してのみでなく、外國人に對しても、同じやうに行つたのだから、實に凄いものであつた。

佛國の天主敎が、漸々、蔓延して來たので、大院君は、直に之を禁止した。けれども、佛人が承知をしない。信者も、日一日と、殖えてゆく、此に於て、大院君は、烈火の如く怒つて、先づ宣敎師、十二人を捉へて、片つ端から首を斬つた。三人丈けは遁れて、行方不明になつたが、同時に、信者も同罪として、斬首されたものが十萬人に上つた、と傳へられてある。纔かに免れて、行方を晦ました、三人の宣敎師は、支那の芝罘まで、逃げて來て、折柄、碇泊中

の、佛國軍艦へ、訴へて出た。それから騷ぎになつて、水師提督の、ローゼ將軍が、江華灣へ、三隻の軍艦で、乘込んで來た。談判の末が、終に戰爭となつたが、佛兵の大勝利となつて、陸戰隊を組織して、水兵が上陸した。所が、大院君は、豫め射虎を業とするもの、八百人を集めて、敵兵の上陸を、待つて居たのだ。水兵が、上陸して來ると、例の兵が、半弓を以て、水兵を射縮めた。虎の眼玉を射るのを、業として居る奴が、人間を射るのだから、眞に百發百中、一本の空矢もなかつた。佛兵は、終に大敗北となつて、放々の體で、芝罘へ引上げた。

文明の先進國を以て誇り、而かも、世界五大强國の一に、算へられて居る、佛蘭西國の水兵は、獵夫の半弓に射縮めらて、戰爭に敗けた抔とは、實に珍聞として、傳ふ可き事ではないか、尤も、朝鮮人の半弓は、世界第一で、虎を射るのに、必ず其眼玉を狙ふのだ。半弓の先に、毒を附けて、眼玉を射るのだから堪らない。大きな虎が、一本でギヤフンと、なるのだ。それを、人間に用ゐたのであるから、百發百中は、當然の事であつた。

その後ちに、亞米利加合衆國と、戰つた事がある。それは、斯ういふ事情だ。合衆國の商船が、大同江へ來て、碇泊して居る、と、夜半に、附近の朝鮮人が、集つて來て、燒打をしかけて、人も、物も、悉皆燒いて仕舞つた。如何にも其所爲は、野蠻の極みではあるが、未だ朝鮮政府が、許してない場所へ、商船を乘入れたのは、不屆千萬であるといふのが、燒打の口實ではあつたが、それにしても、慘忍な所爲とは言へる。合衆國政府も大に怒つて、水師提督ローゼルス將軍に命じ、軍艦五隻を以て、攻め込んだ。

今度は、前年の、佛國の敗戰に鑑みて、餘程、注意して戰ふたから、殆んど連戰連勝の勢ひであつた。流石の大院君も、手を束ねて、敵兵の侵略に、委す外はなかつた。ローゼルスは、江華灣一帶の、沿岸を占領して、大得意で居たが、一日のこと、澤山の捕虜を調べたうちに、非戰鬪員が、大分居る、といふから、猶ほ能く調べて見る、と、それに違ひないので、文明國の戰爭には、非戰鬪員を捕へる、といふ事を許してない。合衆國は、文明國であるから、左樣な不法の事は出來ぬ、といふ意見から、その捕虜を一切、放免する事にして、その旨を通知した。ローゼルス等

は、偕々、得意の鼻高く、之れ位ゐに注意したら、如何な朝鮮政府も、少しは解るだらう、と、密かに政府の咨子を窺つて居た。

放免された捕虜は、各自、家へ歸つて、安心の枕、高く眠つて居る、と、郡衙から呼出されたので、命の儘に出頭した。すると、それ等の人を、珠數繫ぎにして、京城へ、送つて仕舞つた。大院君は、自ら其取調べを爲る。一同の申立は、釋されたから、歸つて來たのだ、といふ迄の事で、米軍の內情を聞いても、それは一向知らぬ。と答へた。大院君は、非常に怒つて、

『此者等は、敵軍へ捕はれて、自國の秘密を打明け、これが爲めに許されたのだ。今、敵軍の內情を糺すに、一向知らぬ、といふのは、慥かに口留を、爲れて來たに違ひない。斯ういふ奴を、活して置くのは、我國の爲めに宜しくないから、速かに斬つて仕舞へ』

と、いふて、一日のうちに、皆な首を刎ねてしまつた。

之れを聞いて、米人の驚きは、非常なものであつた。之れほどの野蠻國は、世界に二つ、とあるまい。斯る國と、戰爭を續けるのは、實に馬鹿らしい事だ、となつて、本國政府へ、この始末を、詳しく報告に及んで、この上、戰爭を續けるには、猶ほ數隻の軍艦と、陸兵を送つて吳れと、いふ事も書添へた。米國政府でも、呆れ返つた。

『そんな、野蠻人を對手に、此上の戰爭は、無駄であるから、一時に、引上げて來い』

と、命令を下したので、ローゼルス將軍も、之れを幸ひとして、本國へ、引上げて仕舞つた。

さア斯うなると、大院君の鼻息は、素晴しくなつた。世界の二大强國が、我が武威に恐れて、斯くの始末だ。その他の國の如きが、何と言はうと、河童の屁ほどにもない、と、氣焰萬丈で、世界を睨んで居た。

その後ち幾年ならずして、修交のことを申込んで、從來の關係を續けやう、としたのが、我日本國であつた。この時の大院君に、日本國を認めさせやう、としたのだから、事の纏まる筈は、なかつたのだ。

四

明治四年の二月になつて、我政府では、朝鮮一條が、全然、緣の絕れたものでないから、未だ談判のしようで、何とかなる、といふ見込みをつけて、外務權少丞吉岡徹藏を正使とし、例の森山茂と、この時は既に權大錄に、なつて居た。廣津俊藏（柳浪實父）とを從けて、對馬まで、遣る事になつた。吉岡は、嘗て遷都の議に、反對した人で、森田節齋の門下であるが、極めて頑固な代りに、硬骨の人物であつた。

一行は、對馬へ着いてから、更に宗義達を以て、朝鮮政府へ、一篇の書面を送り、懇々と、戒諭を加へた。この際、相當の使臣を選んで、應接の任に當らしめるやうせよ、との趣きを申通じた。所が、却々、之れに應ずる樣子はなく、從前と同じやうな、返事が來た。加之ず、對馬の漁夫が、釜山へ漂着したのを、更に保護を加へずして、倭館と稱する、宗家の役所前へ、打棄て行つた。到底、尋常の談判では、駄目と見込んで、廣津權大錄が、宗と共に、急ぎ上京して、此始末を、復命に及んだ。時に、廢藩置縣の事が決して、政府にも、改革が行はれ、澤外務卿は罷免られて、岩倉具視が、外務卿となつたので、改めて宗義達は、外務大丞に任ぜられて、朝鮮へ對する、談判の引繼ぎを、申付けられた。

之れから、宗と廣津は、對馬へ、歸つて來て、談判を爲るつもりで、嚴ましい掛合の、書面を送ると、矢張り同じやうな事を、言ふて來る。宛で曖昧と腕押を、爲るやうなものであつた。

朝鮮政府の、返書は澤山あつたが、そのうちに、斯ういふのがあつた。

『大概三百年、交隣以來、義理昭として、星日の如し、誠信、金石より重く、一動一靜、必ず恒規に遵す。違劃せんと欲すと雖、夫れ能く肯て從はんや。是故に、事、恒規に關すれば、費說を待たずして、以て之れを行ふ可く、若し然らずんば、千言萬語すと雖、徒らに損して益なきのみ。貴國、事例を詳知して、亦交隣謄錄あり、初めより以

來、我國、只約束に遵ぶのみ、何の違式の事あらんや。大修使書契の事、已に四年を過ぎて、未だ復命の地を得ず、故に反覆交渉すること、我之れを知らざるに非らざるも、我國情に於て、順受し難き事由は、其屢說陳せるが如し。其情意を肯ぜずして、更に規外の談論を爲し、又公幹の端を惹かんや。竊かに慨嘆する所也。凡そ交隣に係る事務、皆貴國より主管往復せらるゝも、是れ素、貴國朝廷よりの約條定式にして、兩國の遵行すること、已に三百年の久しきに涉れり。今日に至つて、猝々、何ぞ規外の事を以て、此くの如くに、我を煩はすや、其意を曉るなし。徒らに規外の談論を以て、公幹を持久すればとて、何處にか必成の道あらんや。誠に善隣の交誼を欲せば、一に舊例に由り、速に順序に從て、然る可き也。如何に僕に交渉ありとも、朝廷の處分、已に許さず、僕、亦焉ぞ、敢て自ら議せん。更に之れを以て煩はすなく、深量裁虛、唯隣誼を敦し』に、約條に遵ひ・三百年、和好の舊誼を損するなかる可し。之れ千萬歲、磐泰の長策也』

之れは訓導といふ役の、安僉知が、送つて來た、書面である。

要之、幾度掛合つた所で、この通りなのである。果は、釜山に押渡つて、訓導に、面會を求めたが、之れも一切謝絕されて、殆んど對手に、爲れなかつた。此に於て、我政府でも、最早許し難い。とは思ふが。猶ほ一應。最後の書面を送らう、となつて、

『貴國と我國は、沿海相望みて居る爲めに、双方の漂流民に對する、保護の事を、定めて置き度い。それについては、是非、貴國の訓導をして、我使者に、逢はせて吳れ』

と、斯ういふ意味の、書面を送つた。所が、今度は受取らない。一つ事は同じ事だから、受取つた所で仕方がない、といふのであつた。無禮も、此位まで加へられたら、大概、氣樂なものでも、怒る外はなからう。

吉岡の一行は、對馬を、引上げて來た。廣津一人は、猶ほ對馬に、殘つて居るのだ。吉岡は、此復命を終る、と、辭職して仕舞つた。

五

佐田白茅は、癇癪を起して退き、吉岡は、使命を空うしたり、とて、責を引いて、民間に走る、只だ一人、履留まつたのが森山茂のみであつた。森山は歸京する、と、直に政府へ、一編の建白書を差出した。その大要は斯うである。

『朝鮮へ對する談判は、宗家を、中間に置ては、到底、充分の結果を、得られまい。自家の收利と、舊慣を保たう、とするの心が、何うも拔けないから、敢て朝鮮政府を、援ける次第ではなからうが、急所へ、手の屆かぬ感がある。幸ひ、廢藩置縣にもなつて、國制も一變したのであるから、この際、斷乎たる處置に出て、政府が、直接の關係に爲るのが可からう。それには、堂々と正面から、談じ込むのが、第一である』

この建白に動かされて、政府も、對韓政策を、一變することになつた。明治五年の五月廿八日になつて、朝鮮交涉に關する、一切の事務を、全然、外務省へ移して、舊對州藩の扱つた事は、細大となく、外務省で、引受ける事になつた。

此時は、既に岩倉大使の一行が、歐米各國の視察に、出かけた後ちで、外務卿も、岩倉に代つて、副島種臣が、兼任して居た。副島は、外交については、常に强硬の意見を、有つて居た人で、漢學仕込の嚴格な、態度を以て、外人に接するのであるから、外人のうちには、副島は、非常に究屈な人物として、外務省を、馬鹿にして居たものも、副島に、逢ふ時は、自然、遠慮勝ちであつた、といふ。それについて、面白い逸話がある。

副島は、身邊を、飾らなかつた人である。元來が、物臭い方で、入浴の如きも、月に二三度、衣服は、何時も垢染たものばかりで、頭髮が、長く生つたのを蓬々させて、宛で霜の降つたやうに、髮垢が浮いて居る。その風采たるや、芝居で、能く見る、山男の如くであつた。西洋の外交官は、風采を整へる事が、一つの仕事に、なつて居る位だ。頭髮の蓬々したのや、垢染みたものを着る事は、大禁物になつて居る。然るに、副島は、山男然として、平然

して居るのだから、誰れでも、恐れ入る筈だ。公使拂が來て、會談を、して居る間も、遠慮なく頭を、ポリ〳〵掻きながら話込むので、卓子の上に、髮垢が、霜の降るやうに、落ちて來る、之れには、何んな毛唐も辟易して、二度とは、副島に逢はう、と、いはなかつた。

英公使のパークスは、出身が下賤であつたから、言語態度は、甚だ野卑であるが、東洋駐在の外國公使のうちでは、稀れに見るの、敏腕であつた。この男に、怒鳴り込まれる、と、外務省の役人は、一と縮みになつた位である。某時、副島と相對して、何事か、頻りに議論を、して居たが、此上もない剛情の副島と、威勢並ぶものなき公使と、互ひに我意を張つて爭ふのだから、怒罵の聲が、室外に漏れる位であつた。軈て副島は、次の室へはいつて、少焉すると、出て來た。

『さア、戸外へ行かう』

『戸外へ行きます、何しますか』

『議論は、百日闘はしても、貴下が、讓歩せんことには、結局は決かない。寧そ決闘して、最非を定めませう』

見れば、副島の左手には、長い朱鞘の、日本刀が在る。之れには、流石のパークスも閉口して、終に讓合がついて事は、難なく、濟んだ、と傳へられて居る。今時に、こんな事をしたら、それこそ、世界の問題に、なるのだらうが、この位ゐの覺悟は、何時も、有つて居て、貫ひたいものである。

森山の、建白に基いて、早速に、閣議は開かれた。談判の方針も、此に定まつて、外務大丞、花房義質を、正使として送る事になつた。森山が、從いて行く事は、例に依つて、例の通りである。別に視察員として、陸軍中佐北村長兵衛（土佐）同少佐別府晋介（薩摩）の二人が、同行する事になつた。池上四郎と、武市熊吉の二人は、特別の旨を受けて、支那の牛莊へ派出された。對韓問題は、刻々に、至難かしくなるばかりであつた。

六

朝鮮行の使節は、漸次、人選も嚴重に、なつて來る上に、行裝の如きも、大袈裟になつた。今度は、武官が同行するのみならず、一行の乘船には、明光、春日といふ、二隻の軍艦を、以てした事は、その當時にあつて頗る注意を引いた、といふ。

先是、太政官の命令が、一行へ下つた時、一行の重立つたものが、參議の列席して居る前で、種々の協議を遂げたが、そのうちの一人が、

『朝鮮の事は、既に數年の、長きに渡つて、未だ何れとも決せざるほど、至難い談判であるから、充分に今日までの經過や、關係も調べて、書類の如きは、出來る丈け、披見して置き度い、と思ふから、出發の日限も、多少の御猶豫を願ふかも、知らぬ』

と、述べたので、參議諸公に於ても、何とか、之れに對して、答へをしなければならぬ。出發の日限を動かす、といふ事は、無論不可だ、とは思ふが、この請求も無理でないから、答へに行詰つた。最初から、默然として居た、西鄕は、大きな眼玉を、ギロリと爲せて、

『書類な、調べて、何如仕なさるか』

極く應對の優しく、言語の如きも、薩摩調子で、鋭氣は帶びて居るが、さればとて、角張つて强がる風は、少しもないのだが、この人が、斯ういふ席で、何か言出すと、妙に頭から、押付けられるやうな、心地がして、自然と、頭が下つて來る。折角に、發言した人も、後の答へがすぐに、出なかつた。

『朝鮮の事な、書類ぢや決まらんことでごわす。今日までの成行な、御承知ぢやらう。その上に、何を調ぶるのか、談判な、新らしく開けば可か』

朝鮮人を對手に、從來の經過を繰返し、徒らに歷史の跡を、逐ふた所で、何の甲斐もない事は、今日までの成行でよく解つて居る。それを復た、繰返しに行くのではない。今度の一行は、最初の談判で、而かも、最終の返事を、聞いて來るのだ。それを今更ら、書類を見て、何うする覺悟か、といふ意味で、斯ういふたのだ。

之れが爲めに、一行の出發も、既定の通りで、九月十五日には、釜山へ着いた。途中、對馬へ立寄つて、廣津權大錄を伴ひ、宗家の舊役人は、可然淘汰を加へて、新たに外務省の役人として、一行のうちに、加へて來たのである。然るに、釜山へ着いてから、新たに倭館の、館司になつた、深見六郎を、東萊府へ使者とした。所が、府吏の答へには、

『そんな人は、館司と認められない。また、從來、倭館へ送付した、薪炭其他の日用品も、舊交ある對州人へ送つたのであるから、對州人の手から、倭館が離れた以上、決して一品も、之れからは送れぬ故、念のため斷つて置く』

との事であつた。

それから、朝鮮人の、漂流して來たもの十四人を、この一行が連れて來たので、之れを引渡さう、とすると。

『交際のない、日本政府から、そんなもの受取る事は出來ぬ。勝手に置て行つたら、可からう』

といふ、亂暴な返答であつた。

之れから、といふものは、如何なる事を掛合つても、同じ事を繰返して、更に要領を得られなかつた。訓導とか、差使とか、いふやうな、上級の役人に逢はう、とするが、それも、口實を設けて、一向に取合はない。北村や別府は流石武官丈けあつて、朝鮮人に變裝して、東萊府へ、乘り込み、深く事情を搜つて、歸つて來た。その見込みでは、もはや普通の手段では、充分の結果は得られない、といふ事が解つた。

此に於て、花房、廣津の兩人は、森山を對州に、少錄の奧義制を、草梁の倭館へ、殘して置て、一先づ日本へ歸る事になつた。

七

大院君の眼中、日本國を、認めて居らないから、如何に、此方法を以て、掛合つた所が、それは無駄なことである。普通の手段で、朝鮮政府の、覺醒を望むのは、宛も黃河の澄むを待つ、と均しいものだ。

花房の一行が、東京へ、歸つて來たのは、明治五年の霜月であつた。復命を聞いて、內閣の諸公も、非常に怒つたが、當時の內閣も、常に多少の波瀾があつて、參議のうちにも、その勢力こそ、西鄕派に及ばないが、岩倉派と、握手して居るものもあり、殊に、大藏省には、例の井上馨が、頑張つて居たから、何事も、都合が惡かつた。井上は、參議でないが、大藏大輔を、勤めて居るので、大久保が、留守の間、日本國の財政は、井上に依つて、左右されるのであつた、其時代の大藏省は、今日の大藏省と異つて、內務、外務、兩省の仕事の一部も、大藏省に屬して居た位ゐで、各省から、請求して來る、政費の如きも、一々刪減を加へて、容易に、請求通りには爲ず、甚だしきに至つては、內容に立入つて、指圖がましい事も爲る、井上の性質が、亦た頗る干涉好きで、議論腰の强い、剛情無類といふのだから、何時も、各省との衝突はあつた、井上の消極主義は、有名なものであつた。その時代から、消極主義で押通し『朝鮮抔へ、手を出して、徒らに國費を散ずるは、不可である。それよりか、その金を以て、內地の改良を、爲るが可い。各省の費用も、節し得られる丈けは、ドシ〳〵節するが可い。その上、開戰にでもなつては、國の財政が堪らない。一日を爭ふて、朝鮮を、奪るにも及ぶまい』といふやうな、意見を、强く唱へて、內閣の紛訌は何時も、大藏省が、原因になつて居た。

芝濱の延遠館、後の濱御殿に於て、大藏省の會議が、開かれた時、海陸軍の長官と、外務卿の副島種臣が出席して、第一に、朝鮮の問題が、話題となつたのであるが、副島の意見では、

『今日と相成つては、この儘ま放棄する事は出來ぬ。國の面目としても、斯く交涉が、面倒になつた以上、何とか、

談判の結局が、決いて居らぬ、と、外國へ對しても、甚だ宜しくない。是非、進んで最後の掛合に、及び度い。自然、その狀況で、兵力の幾分は、必ず要するであらうから、今から其覺悟は、して貰ひたいものぢや』

と、副島の意氣は、實に熾んなものであつた。もう兵力に依つて、問題の解決を、爲る外はない、と見て居たのだ。井上は、額に癇癪筋を出して、

『副島さんの、仰せに依ると、朝鮮を、兵力で壓する、といふやうな、議論に聞えますが、それは甚だ宜しくない、と思ふ。掛合ふ丈け掛合ふて、それでも對手が、沒理いといふなら、徹理まで待つて居ても、宜しいぢやないか。今ま、我國が、朝鮮を征服しなければならぬ、といふ理由はないのぢやから、盡す丈け盡しても、不可といふなら一時、放棄しても可いのぢや。第一に恐る可きは、その費用である。それは、何うする御考へか』

『費用は、大藏省で、出せば可い』

『イヤ、そりや不可ません。大藏省には、そんな氣樂な金はない』

『併し、內閣で決まつたら、何とする』

『假令、內閣で決めても、無い金は出せませぬ』

『大藏省が、內閣の決めた事を制する、といふ不法な事は出來まい』

『拙者が、大藏省を、預つて居るうちは、何としても、朝鮮征伐費抔は、出せませぬ』

癇癖の强い井上と、頑固な副島と、顏の色を變へて、爭ふて居る、議論の果は、腕力沙汰に、なりさうだ。當時の役人は、未だ昔の武士らしい所があつて、何んな大官でも、組打位ゐは行つたのだ。

この席に、海軍大輔の勝安房が、居たのだから面白い。勝の仲裁で、その日は、一時預り、といふ事になつて、無事に濟んだ。之れが明治五年の暮で、氣の早い人は、春の支度に、忙しい時であつた。

八

一言に外交といふても、それが却々、むづかしいのである。戰爭を爲るよりか、外交のむづかしいといふ、事は、日本の國民は、最も適切に感じて居るだらう、と思ふ。明治政府が組織されて、既う六十年にも、なつて居るが、外交では、失敗を續けて居るのみだから、全くむづかしいものには、違ひなからう。而て見ると、六十年も前の、外交が、拙劣かつた事は、固より當然である。人物揃といふ事は、表面から見れば、實に立派なものであるが、實は有難迷惑なものだ。一人丈け偉くつて、その他は、凡物の方が、却て仕事は、手際よく行くものである。餘んまり偉いのばかりが集つては、智慧の衝突で、事の運びは、存外悪いものだ。

朝鮮問題に對して、明治六年の內閣が、彼のやうに拙劣いものに、なつたのは、參議の椅子に在る人が、何れも首領株で、偉いものばかりであつた爲めに、議論のみ多く、徒らに交渉が長引いて、事の運びが悪かつたのが、根本の原因となつて、內閣の大破裂を來たし、それからの日本國の損害は、實に尋常でなかつた。

之に反して、朝鮮政府は、凡物揃ひであつたが、只ツた一人、大院君といふ、傑物のみがあつて、無上の權力を、有つて居るのみならず、少し軌道は、脫れて居たが、立派に見識もあつて、思ひの儘まに、ドシ〳〵遣り捲くり、前後を顧みて逡巡する、といふやうな事がなく、誰れ一人として、大院君の爲す所に、强い故障が、言へるものもないので、從つて、結果は何うあらう、とも、考へた事は、直に行ふ事が出來た。日本と朝鮮の事情に、之れ丈けの相違は、あつたのだ。從つて、表面の事實のみを見ると、全然で、輕視にされて居たやうにも見えたが、また、輕視にされて居たのが、實際であつたかも知れぬ。

花房の一行が、日本へ、歸つた跡は、廣津權大祿の、獨舞臺であつた。併し、只だ殘されて居る、といふ丈けの獨

舞臺であるから、事件の進行には、何等の關係もなかつた。されば、朝鮮政府の暴狀は、日に倍々、甚太しくなるばかりであつた。第一は、草梁に於ける、倭館へは、一切の物資を供給しない、といふ事を通告して、食糧攻を始めた。第二は、自國の娼妓に對して、日本人へ賣淫する事はならぬ、といふ布告を出した。こんな面白い事が、他の國にあらうか、食物と女を禁じて、さア何うだ、といふのだから、隨分、奇拔な外交も、あつたものだ。それから、第三の水軍調練といふのが、容易ならぬ事だ。草梁、釜山の沖合で、水軍の大演習を行る、といふのであるから、思ひ切つて、脅迫をしたものぢやないか。

『日本國からは、近日、大兵を差向けて、我國を攻める、といふから、その準備として、此大演習を行ふのである』

斯ういふ亂暴な事を言はれて、眼前で、大演習を行られるのだから、在留の日本人としては、瘤癪の蟲が收まらんのも、無理がなかつた。けれども、本國政府の方針が、瓢簞鯰で、何うにもしようがなかつたのだ。

所へ、森山茂が、釜山まで、遣つて來た。その時に丁度、朝鮮政府から、傳令書なるものが發表された。その大要は、

『日本が、三百年來の習慣を破つて、勝手に談判して來ても、それは到底、駄目である。我國で、貿易を許したのは對州へのみであつて、日本政府へ、許したのではない。今更に何を言ふても、己れの方では知らないぞ。今後、日本人には、一物をも賣る事はならぬ』

と、いふのであつた。

森山も、之れ迄に、狀況が迫つて居る、とは思はなかつた。この上は、如何とも手の着けやうがないから、止むを得ず、此傳令書の寫を有つて、日本へ、歸つて來た。世間の所謂、征韓論なるものは、之れから序開きに、なるのである。

九

森山が、歸つて來た時は、副島外務卿が、臺灣の問題で、清國へ、派遣された跡で、外務少輔の上野敬助が、その代理を、して居た際であつた。森山は、上野に逢ふて、朝鮮の狀況を、詳しく述べた。此上は、尋常の手段を以て、この問題の、解決は出來ない、といふ次第を、例の傳令書まで出して、大に論じたのである。此に於て、外務省の議論も、最早、外務省丈けの問題でない、といふ事に決着して、上野は、正院へ出頭し、諸參議の前に、外務省の見込みも、自分としての意見も、縷々、陳述に及んだ。その結果、愈々內閣會議は、開かれる事になつた。

當時、內閣に列した、參議は、

西鄕隆盛　板垣退助　大隈重信　江藤新平　後藤象次郎　大木喬任

の六人で、太政大臣三條實美を加へて、都合七人であつた。

先づ第一に發言したのは、板垣參議であつた。

『今日までの成行の、森山の報告に由つて、深く之れを考ふるに、朝鮮政府は、全く戰意あつての事であるから、我政府は、之れに應じて、開戰するや否、先づ之れを定むるのが、第一ぢやらう、と思ふ。それについては、外務卿の副島君も、不在の折柄である故、今ま直に之れを定める、といふ次第にも相成るまいが、此に差當つての事は、彼地に、在留の日本人を、如何にして保護するか、之れが大切の問題ぢや。朝鮮政府に、戰ふの意あり、とすれば、今後は、如何なる亂暴を、爲さんも計り難い。仍て先づ、居留民保護の手段として、一大隊の陸兵を、釜山へ送つて、萬一の變に備へる、といふ事が、焦眉の急であらう、現に、我が橫濱にも、英佛二國の屯兵がある。いづれの政府にしても、自國民の、保護を爲る手段としては、此他に良策はあるまい。直に之れより出兵して、保護の準備を盡すのが急務であらう。今日までの成行に關する、談判の如きは、外務卿の歸朝を待つてからでも、遲くはある

意氣軒昂、都合に依つては、拙者が、兵を率ゐて、行くも可し、といふ、態度が見えた。

『イヤ、そりや不可んよ』

平生は、緘默を守つて、容易に、口を開かざる、西鄕は、斯く言ふたのである。

『何故、出兵は、不可んのですか』

『さ、その事ぢや。已どんな不可んと、思ふのぢや。朝鮮政府の無禮な、最初からぢやらうなア。今日まで堪らへて今更に兵を出すのは、對手の陷穽に、墜ちるやうなものぢやよ。そいよりや、誰れか猶ア一度、遣るのでごわすな。出兵な、そいからでも、可か思ふが、何うぢやらうか』

『我輩の出兵は、開戰の爲めではないのぢや。居留民の保護が、目的ぢや』

『併し、兵隊な、戰爭するもので、ごわすからな』

『それでは、居留民の保護は、何う爲る、覺悟か』

『そや、心配な要るまい。手を出さんで、控へて居るものを、討つ事もあるまい。萬一あつたら、其時の事ぢや。畢竟、今までの役人な、下級のものでごわしたから輕く見たかもしれん。今度な御互のうちで、誰れか行く事に爲るのぢや。釜山邊の小役人な、對手にならんからな、すぐ京城へ乘込んで、正々堂々の談判な、開き申すのぢや。戰ふも戰はぬも、そいからで、ごわすよ』

西鄕の考へは、內閣の班に、列するものを送つて、直に朝鮮政府の大官と、膝話の談判を開かう、といふのであつた。之れには、何か確信があつて、言ふたに違ひない。例の西鄕流の、情義の上から、攻めて行かう、といふのだ。併し、野蠻な朝鮮政府へ、此流儀を用ひよう、といふのは、頗る危險なものである、が、西鄕は、些も左樣な事を考へて居ないのだ。自分の方から、情義を以て責めれば、對手の方でも、又た情義を以て迎へるものである、と、確乎、

決めて居るのであつた。其處が、西郷の偉人たる所以である。

一〇

三條太政大臣は、溫厚の人であつて、到底、國家の大問題を料理する、といふやうな、手腕ある人でもなく、朝鮮に對する政策が、斯う至難しくなつて、來た場合に、自己の見識を以つて、英斷を行ふ、といふやうな、左樣いふ事の出來る人では、なかつた。只だ文久の昔から、引續いて王事に勤め、九州の端までも漂浪して、正直に能く働いたといふ迄の事である。併し、覇氣も圭角もない。頗る圓滿溫良の人物で、何處となく長者の風があつて、それが三條卿の取柄で、あつた。

西郷の說を、熟と聞いて居たが、何うも不安に堪へぬ、と思ふたか、

『西郷はんが、言はしやる事は、朝鮮の朝廷と、直接に談判しなはる、と、斯う言はしやるのぢやのう』

『左樣で、ごわす』

『それから、大使には、我等のうちで、誰れか行かう、と、斯う言はしやるのぢやのう』

西郷は、輕く首肯いた。

『それならば、我等も可い、と思ふが、大使となつて行く人に、板垣はんの、言はしやる通り、護衞として兵隊を、連れて行かんことにや、何ないな危ない事の出來やうも、知れんでな』

『そや、不可んよ』

『不可ん、ははア』

『板垣參議な議論のやうに、最初から、征服する覺悟なら、軍艦も、兵士も、そや必要であらうが、己どんな考へは修交大使を、派遣するのぢやから、大使の派遣に、軍艦や兵士は、穩當で無か思ふ。飽迄も、禮を盡し、辭を卑ふ

して、只だ天地の正道を履んで、懇談を遂げたなら、そいで可か、と、己どんな思ふのぢや』

『西郷はん、貴君は、そないに思やはつても、先方が解らんのやから、萬一にも、亂暴を働かれては、一大事やに依つて、兵隊丈けは、連れて行きなはつたら、何うやろか』

『至誠を以て、事に當るのでごわす。侵す心の無か、そや勿論のこと、侵さるゝ考へのあつて、之れに備へて行くやうでは、そや、至誠を缺いて居るものぢや。亂暴な働き居れば、殺さるゝまでの事ぢや。討つも討たるゝも、そいからの事で、人間の力で、防ぐ事は出來ぬ。只だ天だ天で、ごわすよ』

假令ば、朝鮮政府に、何んな心があらうと、そりや、此方では構はぬ。只だ正々堂々と、至誠を以つて、之れに對する。若し大使が襲擊されたら、それまでの事だ。平和の天使が、兵隊を率ゐ、兇器を携へて行く、と、いふのは宜しくない、といふのが、西郷の主張であつた。

この心を以て、天下萬人に對するのだ。如何なるものも、感化されて仕舞ふのは、無理はない事であつた。出兵論を主張した、板垣參議は、謹嚴な態度になつて、莊重な口調を以つて、

『我輩は、西郷參議の、意見に從ふ。出兵論は、自ら撤回ことに爲る。大使を派遣して、至誠、事に當るといふものが、兵士を率ゐて行くのは、宜しくない。我輩は、居留民の危險を思ふたので、出兵を、必要としたのぢやが、此場合に、內閣の議論が、兩端になつては面白うないから、我輩の出兵論は、撤回る事に爲る』

若し、西郷と、爭ふものがあり、とすれば、板垣參議が、之れに當る可き筈であつた。その板垣が、潔よく自說を撤回したので、他に議論の、起る可き事情はない。三條は、反對したのではないのだ。懸念の餘り、注意した丈けの事であるから、之れも、默つて仕舞つた。此に於て、大使派遣の事は、先づ反對はなく、內決したやうなもので、その日は濟んだのであるが、この席には、大木、大隈の二人も居つて、さらに可否の事は言はなかつたが、反對は爲なんだのだから、無論異見はなかつたものと見て、敢て差支へはないだらう。それが、後日になつて反對したのは、實

に不思議な事である。

一一

閣議は、大使派遣に内定したが、それは、單に内定であつて、確然、定つたのではなく、副島外務卿が、清國へ行つて居るから、その歸朝を待つて、更に確定しよう、といふのであつた。然らば、副島の清國行は、何の爲めであつたらうか。之れを簡單に、說明して置き度い。

先是、伊達宗城が、全權大使となつて、明治四年四月廿七日を以て、清國に渡つた。その要件は、新たに結ぶ可き條約の協商を爲す可く、李鴻章を對手に、談判は、着々進んで、條件も、略ぼ纏つたが、折柄、岩倉大使の一行が、條約改正の内談を、遂ぐる爲めに、歐米巡遊の途に上つたので、果して、何ういふ條約になるか、その權衡を量らねばならぬ、といふ議が起つて、清國條約は、假條約として、一時、批准を見合せる、といふ事になつた。伊達大使は止むを得ず、李鴻章に、其趣きを通ずる、と、何うしても應じない。此場合になつて、彼是れ言ふなら、廢めて仕舞ふ迄だ、といふて、頑張られたので、伊達から、詳しく其事情を、報告して來た。副島も、之れには弱つて、終に批准交換を、爲ることになつた。

恰も、此時、臺灣の蠻人が、琉球の漂流人を、慘殺した事件が起つて、閣議が、非常に喧ましくなつた。副島の意見は、

『批准交換の爲めには、外務卿が、自身に行かねばなるまいから、之れを幸ひに、臺灣の事も、序に朝鮮の事も、一應談判して、清國の意向を、確めて來よう、臺灣と、朝鮮に對しては、清國が、常に屬國扱ひを、して居るのだから、この際を利用して、清國政府の意向を、確めて置いたら、他日、若し、征討軍を差向けるにしても、萬事、好都合であらう』

と、いふのであつた。之れには、一同も異存がなかつた。其處で、副島が、清國へ行く事になつた。それが、六年の二月二十七日であつた。

この時に、僥倖の事があつたのは、マリヤルズ號の事件である。マリヤルズは、南米白露國の商船で、非常に惡辣な、手段を以て、支那人二百餘名を、奴隷として自國へ、連れて行く途次、横濱へ來て、碇泊して居たのだ。それが神奈川縣廳へ知れて、參事官大江卓が、大英斷を以て、マリヤルズの出帆を差止め、支那人を、悉く解放して、清國へ、送り返した。白露政府の抗議で、之れが大問題となつて、領事の立會裁判が開かれ、審議が、數日に渡つて、日本政府の勝利と、なつた。けれども、白露政府は、之れに服せず、世界の問題とした。列國協議の上で、その裁斷を、露國皇帝に、一任する事になつた。所が、露國皇帝の裁斷は、日本政府の處置を以て、適當なりと認め、白露政府の敗訴と、いふ事に決した。奴隷制度は、文明國の主義に反する、といふの趣意で、日本政府の處置を、適法と認めたのであつて、日本政府は、大に面目を施した。

之れが爲めに、清國政府が、日本政府へ對する、態度が、幾分か改まつて來たのみならず、陰に、陽に、之れに由つて受けた、便宜は、決して尠くはなかつた。

北京へ着いてから、副島は、到頭大使の格を以て、各國公使の上に居らう、と爲る。それについて、苦情が起つたけれども、副島は、飽迄も、之を主張して、終に言ふ通りになつた。清廷の夜會の節も、上席に在つて、思ひの通り大使の格式を傷けなかつたのは、偏に副島の働きであつた。

臺灣と朝鮮について、清國政府の責任を、問ふた時も、李鴻章が曖昧のうちに、瞞着さうとしたのを追究して、之れも屬國でない、といふ立派な、言質を採つた。この時の副島は、慥かに日本の外交の爲めに、非常な氣を吐いたもので、假し、副島の晩年は、振はなかつたにもせよ、當年の副島は、日本の外交史に、特筆さる可き人物であつた。

副島の歸朝に仍つて、朝鮮が、清國の屬邦でない、といふ事が確まつたから、臺灣は後廻し、となつて、取敢へず

朝鮮の方から、極めて行かう、といふ事になつた。

一二

話頭は、岩倉大使一行の事に移る。

一行が、留守中の內閣には、臺灣、朝鮮の二問題が起つて、酷く混雜をして居た。それと同じやうに、洋行連の方でも、常に紛糾があつて、終に大久保と、木戸の間に、非常な軋轢が起つた。歐羅巴に入つてからは、兩者の反目、殆んど其極に達して、事毎に、相爭ふに至つた。加之らず、伊藤博文と、木戸の間にも、意見の相容れざるものがあつて、伊藤は、自然と、大久保に、接近するやうになつた。抑も、安政の昔から、木戸の扶掖を得て、位置を造つた、伊藤が、偶ま意見の異る所があつて、直に大久保に走つたのは情義に於て不可であるが、さればとて、政治家を以て起つものが、說を曲げて、私情の爲めに、木戸の配下を離れぬ、といふ事も却々に至難であつた。必ずしも、伊藤をのみ咎むるのは、善くないかは知らぬが、木戸も甚だ偏狹の誹を、免れなかつた。古人も、言ふた通り、兩雄並立たずで、大久保と木戸の、性格や主義が、餘りに背離して居たのも、不和の一因にはなつたのであらう。

初め米國から、大久保と伊藤が、國際委任狀を、取りに歸つた。その時に、修交使の一條が、大部進んで居たので之れが頻りに、此一行の間に、討究されて居たのだ。結局が、今日の場合、海外に、事を構へるのは、國家の爲めに得策でない、といふ事に決して、それが爲めに、歸朝を急ぐ事になつた。

長い間、鎖國主義に、養はれた頭腦で、一時は、歐米の土地を履んだのであるから、先づ物質上の文明に、目も眩み、胸も躍つて、歸國の後は、何事を措いても、內治の改善を、專らにしよう、と、一行の心は、早くも決した。然るに、本國では、修交使の一條が、動もすれば、征韓論に、傾かんと爲る。その傾向が、解つた以上は、少しも疾く歸朝して、之れを抑へなければならぬ、といふのが、岩倉初め、重立ちたるものゝ意見であつた。此に於て、大久保

は、一行に先んじて、六年の五月二十六日に、歸つて來た。

大久保の歸朝するや、大隈、大木の二人は、直ぐに訪ねて來て、修交使派遣の事について、詳細なる報告をして、大久保を、焚付けたものだ。所が、大久保は、迂濶に手が出せない、と見て、直ぐに函嶺へ、逃げて仕舞つた。病氣と稱して、都門に遠ざかり、可成く事件に、觸れないやうにして、岩倉大使の歸朝を、待つて居たのである。木戸は大久保と同時に、歸る可き筈であるのを、殊更に辭柄をつくつて、大久保に遲れ、七月二十三日に、歸つて來たが、之れも病氣引籠りで、一切の人に、逢はぬやうにした。

副島が、淸國から、歸つて來たのが、七月二十六日で、木戸の歸朝と、三日違ひであつた。副島の意氣は、實に盛んなもので、殊に、李鴻章の言質を、採つて來たのであるから、朝鮮の事は、支那に關係がなく、如何なる處分も加へられる、といふので、直ぐにも修交使を派遣したい、との意見を、有つて居たのだが、その使節は、自ら之れに當らう、といふのであつた。一日の閣議に、再び此事が、問題になつた。

『事が、外交に關する以上、之れは、外務省の爲す可き事である。殊に、拙者は、李鴻章の言質を、採つて來たのであるから、この談判を爲るには、萬事について、都合が好いから、拙者が、此任を、引受け度い』

と、いふ事を主張した。西鄕は、之れを遮ぎつて、

『事は、外交に關して居るが、己どんが主張して、決まつた事であるから、この役は、己どんが引受ける』

雙方の主張が、終に衝突して、容易に決しなかつたのを、板垣の仲裁で、その場は、一時濟んだが、西鄕が、之れほどに熱して、爭ふた事は、前後に恐らくなからう、と思ふ。然るに、副島の決心も、容易に曲げ難いので、同志の間には、この調停に、苦心するものが多かつた。

一三

表面に、現はれた丈けの、事實では、この時の閣議を以て、直に征韓論である、とは言へないのである。假し修交大使の派遣が、或は征韓論に、變じて來るのであらう、とも、それは、後日の結果であつて、之れを推測して、この閣議を、征韓論と稱するのは、少し無理であらう。併し、征韓論といふた方が、早解りもすれば、強くも響くので、遂々、征韓論の閣議と、いふ事に、なつて仕舞つた。

既う、岩倉大使の、歸朝も近くなつたし、旁々、誰れを以て、遣韓大使とす可きか。之れを速く、決めて置き度い、と思ふのは、西郷の考へであるが、意外にも、副島が、自ら行かう、といひ出したので、西郷が、之れに當らう、と思ふた豫算が、瓦落りと脱れて、流石の西郷も、頗る苦しんで居た。仲裁の役に當つた、板垣參議は、極めて親切な人であるから、何とかして、此融和を謀らう、といふので、一夜、青山の西郷邸を訪ふた。

陸軍大將近衞都督兼參議といふ、長い肩書を有つて居る、日本第一の大官が、青山に邸が在る、といふなら、何んな立派なものかと、誰れしも思ふであらうが、それが意外な事で、その時分、五兩の家賃であつた、といふから、普通の人としては、隨分、大きな家でも、西郷の家としては、身分や位地から、考へて見て、粗末なものであつたらう。如何に、物價の安い時分でも、五兩の家賃は、安過ぎる。

廣々とした大空地に、大きな沼のやうな池があつて、その四周に、雜草の蓬々茂つて居る、といふ、誠に無雜作な、之れでも庭である。その庭に面して、廣い座敷のうちに、今ま頻りに、話込んで居るのが、西郷と板垣である。

『それでは、何うしても、貴君は、朝鮮へ行かう、と言はれるのか』

西郷は、窮屈さうに、膝を合せて、

『左樣でごわすよ。已どんな、既う決心して居るのぢや』

『副島が、自ら之れに當らう、とするのも、外務卿としては、無理のない事と思ふが、貴君は、何と思はれるか』

之れには、西郷も、辯解の辭がないらしく、少焉、默つて居たが、

『、、、そや、無理とは思はんが、之れ丈けは、已どんに、任せて貰ひたか』

『何うしても、貴君の決心が、其點に在る、といふなら、副島を訪ふて、懇談を遂げたら、相談も出來やう。副島は、元來が、情義に厚い男であるから、貴君は、年長でもあり、先輩でもある。何れから見ても、長者たる貴君が、自分で、賴みに來た、となつたら、副島は、必ず承知するに違ひない』

『左樣なるぢやらうかな』

『無論と思ふ。若し違ふたら、拙者から話さう』

『この上とも、御助勢賴み申す』

板垣は、副島の氣性を、よく知つて居るから、西郷に、此方法を敎へた。その翌日、西郷は、自身に、副島を訪ふて、懇々、賴み込んだので、副島は、終に大使を、西郷に讓る事になつた。此に於て、西郷から、頻りに閣議の請求を爲る。けれども、三條卿は、更に閣臣の、召集を行はない。大久保と木戸の、病氣屆が出て居るのと、近く、歸朝の、岩倉を憚かつて居るらしい。西郷は、止むを得ず、板垣、副島からも、此請求をして貰ふ事に、賴み込んだので、終に三條卿も、八月十七日を以て、閣議の當日、といふ事に決して、召集狀を發した。

十七日の閣議には、大隈、木戸の二參議も出席した。西郷、板垣、副島、江藤、後藤の五參議は、何れも出席して、格別の議論もなく、西郷を、遣韓大使と、なす事は、此に決定して仕舞つた。列席の大隈、大木も、敢て異論は唱へなかつた。

翌十八日に、三條卿から、迎ひが來て、西郷は、直ぐに出かけた。この時、改めて、遣韓大使と決定した事を傳へ、公然の發表は、岩倉大使の、歸朝を待つて行ふ旨を、告げられた。同時に、三條卿は、函嶺の行在所へ急行する事になる。西郷の滿足は、言ふ迄もない。

一四

三條卿が、函嶺へ急行して　陛下へ、上奏の結果は、西郷の大使たる可き事を、御內裁相成つた、との事で、之れを傳へ承つた、西郷の喜びは、實に非常なものであつた。當時、板垣へ、送つた書面が、今も殘つて居るが、それを、此に揭げて見よう。

昨日は參上仕候處御他出にて御禮も不申上　實に先生の御蔭を以て　快然たる心持始て生じ申候　病氣も頓に平癒三條公の御殿より先生の御宅迄　飛び參り候仕合　足も輕く覺申候　もはや橫棒の憂も有之間敷　生涯の愉快此事に御座候　用事も相濟候故　又々靑山へ潛居仕候　此旨乍略儀以書中御禮而已　如此に御座候

頓首

この書面に仍つて見るも、如何に、西郷の嬉しかつたか、といふ事が解る。書中に在る、病氣といふのは、餘り肥滿するので、それを療治する爲めに、醫藥に親んで居たから、それで、斯う書いてあるのだ。畏れ多くも、之れについては

陛下より、侍醫に御沙汰があつて、療治を、受けるやうになつて居た。

この時に、西郷の詩がある。

酷吏去來壯氣淸　　須比蘇武歲寒操
欲告不言遺子訓　　應擬眞卿身後名
難離難忘舊朋盟　　故天紅葉凋落日
之れに依つて見ても、西郷の決心は、明かに察せられる。　　遙拜雲房霜劍橫

自分が、朝鮮へ行つてから、萬一の災禍があつたら、出兵萬端の善後策は、偏に板垣と伊知地正治の、二人に賴んであつた、といふが、朝鮮の事は、到底、兵力でなければ駄目だ、といふ覺悟は、あつたのだ。

明治六年九月十三日になつて、岩倉大使の一行が、歸つて來た。豫て大久保や伊藤から、聞いて居たよりも、大使派遣の事情が、切迫して居たのには、岩倉も、少くなからず驚いた。

大木參議が、訪ねて來て、

『何うも困りました。西郷大將を、朝鮮へ遣らなければ、無事の結局は見られまいし、といふて、西郷を遣つたら、必ず戰爭になるに違ひない。これは、閣下も、餘程、愼重に御考へを、願ひ度い』

『實は、我等も、苦心して居るのぢやが、西郷は、何としても遣る事は出來ぬ。』と工夫せにや、なるまい』

『それについて、猶ほ一つ困つた事が御座りまする』

『ふーむ、そりや、何か』

『大久保と木戸の、折合が惡い事です』

『そりや、我等も、歐米に居る時から、胸を痛めて居たのぢや』

『歸朝して居るのに、未だ逢はんやうですからな』

『何と、未だ二人は逢はぬ、とか』

『左樣』

『ふーむ』

岩倉は、眉を寄せて、考へに沈んだ。廟議を、開く前に、何うしても、先づ之れから、調停てかゝらねばならぬ。それについては、誰れか、此役に當るものを、との考へで、漸次、思案もして見たが、先づ伊藤と、木戸の交情を、舊のやうに爲る事が、何よりも先決問題だ。伊藤を說得するには、誰れが可からうか。この相談には、大隈參議も與かつて、遂々、黑田淸隆が可からう、といふ事になつた。

黑田は、極めて單純な人で、只だ西郷を、朝鮮へ遣つては、必ず殺されるに違ひないから、何でも、之れを止めさ

せよう、といふのであつた。外に何等の考へも、あるのでなく、この事情を、能く知つて居るから、黒田を働かせて、伊藤を說きつけ、木戸に、何とか挨拶を爲せて、木戸の感情を和らげ、それから徐々に、大久保と木戸の、關係に移らう、といふので、黒田を、岩倉が招いたのだ。無邪氣な黒田は、そんな事情は知らず、岩倉邸へ、遣つて來た。

岩倉の苦肉策と大西郷の憤怒

一

黒田の性質は單純して居た。策を設けて、他を欺く、といふやうな、小手先の早技は、決して出來ない人であつた。況して、自分の爲めに、他を擠して迄、自分の立場を造らう、とするほどに、質の惡い人でもなかつた。何うか爲ると、他の煽動に乘つて、意外の失敗を、爲る事もあつたが、惡氣のない人だ、といふ事が、よく知れて居たから、その失敗は、自然と、他が許して、左迄には咎めなかつた。

豪快な氣質を、有つて居たから、昔の英雄傳に、よく有るやうな、面白い逸話にも、富んで居る。同時に、然諾を重んじて、他の危急を救つた事も、少からず在つた。

征韓論には、最初から反對で、親よりも大切に、思つて居る、西郷が、遣韓大使になる、といふ事には、強く不同意を唱へた。之れについては、殆んど大久保と、同じ道を行く人となつた。西郷が、大使となるに反對したのは、西郷の殺されん事を、恐れたが爲であつた。他の反對の理由とは、全く事情を、異にして居たのである。この區別は、充分にして置ないと、問題の眞相を、誤る事になるから深く注意して置く。今迄の學者や論客が、この區別を、明白に爲なんだのは、頗る遺憾の次第であつた。

それであるから、征韓論には同意であるが、西郷を、渡韓せしむるには、反對である、といふ一派もあつた。大久

保なども、口へ出す事は出來ぬから、只だ、內治改良の、一點張で進んだが、その實は、この際に、西郷を、亡ぶ事を嫌つて、强硬なる反對を、唱へたのであつた。他の一派は、西郷が、談判を破つて來て、薩州人の力で、朝鮮を征服されては、此上に、薩人の跋扈が、一層はげしくなつて、とても、忍び居られぬ、といふ考へから、最も猛烈に、反對したのである。長州派と、岩倉派の握手は、全く此點からで、非征韓派の勢力は、この異分子の結合が、巧みに爲れた結果であるから、その內部は、非常に、複雜なものであつた。

併し、黑田や西郷從道が、大西郷に反對した事は、實に意外の事實であつて、誰れが聞いても、豈夫に左樣ことが、と、一度は疑ふものもあろうが、非征韓派にも、二樣の種類が、ある事を知らないからだ。黑田や從道が、この反對は、心苦しくもあつたらうが、よく彼れまでに、突張り得た、と思ふが、大西郷を殺すまい、と思つて、却て城山の慘劇を、見るに至つたのは、二人も、實に殘念であつたらう。

却說、大隈は、岩倉の賴みで、黑田を說きつけにかゝつたが、黑田は、心やすく受け入れた。伊藤を說いて、木戶に詫まらせる、といふのは、鳥渡思ふと、何でもない事のやうで、その實は、之れ位ゐ、至難かしい事はなかつた。伊藤も、俊輔の昔から、木戶の世話に、なつて居て、之れに背いた、といふのは、全く自分の意見が、木戶では行はれない、と見て、衝突の結果、大久保に、走つたものであるから、伊藤の決心は、却々に堅いのであつた。それを强ひて、木戶の前に叩頭させやうとするのであるから、並大抵のものでは、引受けもしまいし、また、出來そうもない事であつた。

黑田の身に、なつて考へる、と、非征韓派の內部が、割れて居ては、大使派遣論を、破る事は出來まい。それが出來なければ、大西郷を殺す事になるから、自分としては、飽迄も、大西郷を救はねばならぬ、と、此事については、一生懸命であつた。それには、木戶と大久保の間を、調停するのが、第一策であつて、伊藤が、木戶の心を和げれば

大久保との間も、自然、調和が取れて來る。其處で、非征韓派の、結合も堅くなるから、大西郷を、死地に就かせずして濟む、と、斯う考へて、伊藤を、說く可く、此役を引受けたのであつた。

伊藤にしても、木戶と、衝突はしたが、昔の恩を、忘れたのではなく、親分は、那邊までも親分なのだから、喧嘩した儘では、何となく、寢醒めも良くない。所へ、黑田から話があつた。黑田の話振が、例の單純な調子で、「親分に背いて何うするか、はやく詫まつて仕舞へ、それが爲めに、大久保との間が、惡くなつて居るのは、汝へが惡いからだ。己どんが周旋するから、今のうちに詫まれ」といふのであつたから、伊藤も、之れを幸ひにして、黑田の扱ひに任かせる事にしたのは、伊藤も利口だが、黑田の心事に、一點の曇もなかつたのが、伊藤を、動かすに至つたのである。

二

木戶も、洋行から歸つて、內治改良を急務とする。論者の一人であつた。隨て、征韓論には、反對なのである。然るに、洋行の途中で、伊藤に背かれ、大久保と衝突して、歸朝以來、甚だ樂まず、病氣と稱し、門を閉ぢて、客にも逢はずに居た。けれども、大西郷の渡韓については、少からず、心を苦めて居たのだ。それを破るには、大久保と、提携する必要がある。同時に、長州派の結合を、堅くしなければならぬ。左樣なると、伊藤を遠ざけたのが、何よりも不都合であつた。之れには、些か困つて居たのだ。所へ、黑田が遣つて來て、頻りに宥める所から、それを、幸ひとして、調停に應じた。黑田は、すぐに伊藤を、連れて來て、木戶の前に、頭を下げさせた。伊藤は、自分の過失を謝して、木戶の意を、迎へる事に努めたので、兩者の反感は、案外に、容易く治まつた。木戶から勸めて、大久保を、參議に推さう、とした事も、直ぐ決まつた。反對派の不平を、防ぐ爲めに、副島も、同時に參議として、推す事になつた。之れが、十月十二日であつた。

大久保は、當時、大藏卿にあつたが、參議の椅子には居なかつたから、參議に參列して、發言する資格はあつても採決の數には入る事が出來なかつた。副島も外務卿にあるから、之れも大久保と同じであつた。其處で、反征韓派は、大久保を、參議にする必要があつて、征韓派の副島も、かへることにしたのである。

岩倉の一派は、內部の調停やら、種々の事情で、紛糾のうちに、日を送つて居たが、之れで悉皆、整調が決いて、最早、大丈夫となつた。大久保と副島が、參議に推された日が、恰も此問題について、閣議が開かれる日であつた。今ま試みに、兩派の參議と、年齡との對照を示すなら、先づ斯うである。

大使派遣論者

西郷隆盛（四十七歲）　副島種臣（四十五歲）　江藤新平（三十九歲）

板垣退助（三十六歲）　後藤象二郎（三十五歲）

非大使派遣論者

大久保利通（四十四歲）　木戸孝允（四十三歲）　岩倉具視（四十二歲）

大木喬任（四十二歲）　大隈重信（三十五歲）

三條實美は、太政大臣であるが、大使派遣論の一人で、歲は、三十六であつた。

今日は、閣議の通知に接して、西郷以下の五參議は、意氣昂然、打揃ふて出頭した。三條卿も、疾くから出て居た所が、岩倉、木戸、大久保は、どうした事か、缺席であつた。午後に及んでも、姿を見せなかつた。

『今日は、折角の事であるが、岩倉公が見えなはらんばかりでなく、大久保、木戸の兩參議も、見えん依つて、明日に延期しやうと、思ふが、何うしたもんや』

と、三條卿が、いふのを聞いて、西郷は、稍や氣色を變へた。

『こいや、怪しからん事ぢや。元來、この事な、八月中に、決まつて居るのでは、ごわへんか、そいに、岩倉どんな歸つたのは、先月の今頃ぢや。今日の會議に缺席するのは、異論の無か爲めであらうから、此儘に、決めたら可か。明日に延期する事な、己どんな、不服でごわす』

『一座は森として、唯だ西郷の呼吸の、せわしいのが、聞えるばかりである。

『そりや、御尤ではありまするが、何分にも缺席の御方も、多いもんや依つて……』

『不要、遠慮でごわす。國事を餘所にするものな、何うでも可か。この儘決めたら、それで可か』

三條は、默つて仕舞つた。

西郷は、頻りに三條の、優柔不斷を責めるので、三條は、澁い顏をして、默つて居るのみであつた。同志の參議から、西郷を宥めて、一日を延期する事になつて、三條は、宮中へ伺候した。その跡は、御下賜の酒肴で、宴會を開いた。西郷は、未だ怒りが收まらず、三條の不決斷を、痛罵するのを聞いて、江藤は笑ひながら、

『西郷さん、そりや、貴下が、無理ぢや』

『何故、己どんが、無理か』

『三條さんに、決斷せよ、といふのは、比丘尼に、睪丸出せ、といふのと、同じ事ぢや、アッハ、、、、、』

この冷罵を聞いては、西郷も、思はず失笑したが、一座の參議も、手を拍つて、どッと笑ふ。之れで、其晩は、無事に終つた。

三

西郷を、朝鮮へ遣るまい、として、頻りに苦心したものは、黑田の前に、もう一人、桐野利秋があつた。桐野も、後日には、熱心なる征韓論にはなつたが、最初は、西郷を、遣るまいの一心から、非常に引留たのだ。けれども、西郷の

決心が堅いので到底、自分の力で、引留める事は至難しいと考へた。此上は、西郷が、最も信頼して居る、板垣退助に、頼の外はないので、先づ山地忠七を尋ねた。

「貴君に、頼みがあつて來たのぢや」

『そりや、何ういふ事か』

『西郷先生の一條ぢやが、板垣參議に相談して、貰ひ度いのぢや』

『ふゝーむ』

『板垣先生には、いく度も逢ふては居るが、貴君の紹介を得て、充分に、話を仕度い、と思ふのぢや』

『よろしい、一しように行かう』

『實は、西郷先生が：：』

山地は、手を揮つた。

『そりや、聞かんでもよい。拙者が、聞いても無益ぢや。拙者は、足下を紹介して、足下は、板垣先生に、話を爲る先生は、其話について返答しなさる。それ丈けの事ぢや、ハッハ、、、、、』

『そいぢや、一緒に行つて呉れるか』

『うむ』

之れから、二人は打連れて、木挽町の板垣邸へ、遣つて來た。

山地は、後の鬼將軍元治の事だ。桐野は、薩藩唯一の荒武者、山地の方が、位地は、幾分か上級であつた、同じやうに、荒い氣性の人が寄ると、却て交際の善いものだ。板垣は、此二人に比べる、と、遙かに先輩であつた。山地の如き人物でさへ、板垣を、先生と、呼んで居た。

桐野の頼み、といふのは、斯うであつた。

『西郷を、朝鮮へ行かぬやうにして、貰ひ度い。それを押切つて、言ふて下さるのは、先生の外にない。また、先生が、言ふて下されば、必ず中止するに違ひない、と思ふから、是非、頼み入る』

板垣は、桐野の心中を察して、

『宜しい。左樣いふ理由なら、一應は、話して見やう。併し、西郷さんも、今度は却々、決心が堅いやうぢやから、或は肯かぬかも知れないが、說ける丈けは、說いて見やう』

と、快く引受けて呉れたので、桐野は、大に喜んで、歸つて來た。

その晩、板垣は、西郷の邸へ行つた。然るに、西郷は、種々と、談話の末に、

『板垣さん、今度の件については、種々御盡力であつたが、何うも沒理漢が、多いので困る。先達も、桐野が、遣つて來居つて、己に、朝鮮へ、行つて呉れるなといふのぢや。己は、大喝して逐歸したが、汝の從弟の、別府晋介は何うか先生、今度は、朝鮮で死んで下さい、といふて、己に、迫つて居るのに、汝は從兄でありながら、そいが解らんのか、といふて、叱つてやつたが、斯ういふ輩があるから、實に困つたもんぢやよ』

例の高笑をしながら、無邪氣に、言つて返けた。西郷には、何の考へもなかつたのだが、板垣は、現に其事で、訪ねて來たのであるから、些か機先を、制された形で、板垣は、何も言はずに、歸つて來た。桐野から、頼まれた事も之れで、空しくなつて仕舞つた。

桐野が、征韓派になつたのは、それから後日の事だ。何うしても、西郷が肯かないから、それならば、自分も、共に行かう、といふので、果は、岩倉の前に、短刀を光らして、激談を爲る迄に、なつたのである。

四

西郷は、朝鮮で死ぬ、覺悟であつたかも知れない。飽迄も、自分が、大使として行かうと考へたのは、それが、

爲であらう。之れを抑へるには、普通の方法では、到底駄目であつた。岩倉は、深く考へて、十三日の夜になると、三條を、密と招いた。

『貴公が、之れに同意した、といふのが、既に間違ふて居る。西郷を、朝鮮へ行る、とは、何といふ愚な事を、定めたものぢや……』

『愚かろうと思ふて、した事ではない。此如な至難しい事になる、とは、更に思はなかつたのぢやからのう』

『それが、不可んのぢや。之れが無事に、治る問題ぢや、と思ふて居られたのか、馬鹿らしいにも、程度がある』

三條は、那邊までも、溫順な御方であるが、岩倉の方は、覇氣があり奎角の多く、公卿の出身としては、餘りに膽氣に、富むで居る所から、何事についても、此流儀で、頭からガミ〳〵と、遣りつけるのであつた。三條に對しては多少の遠慮もあるが、それにしても、斯ういふ風なのだからその平生が、察せられる。三條は、腕を組むで、何とも言はない。岩倉の眼は、凄い光りを、有つて居る。

『西郷を遣れば、直ぐ戰爭に、なるのぢや。何うしても、西郷を遣る事は、止めさせにやならぬ。貴公の御考へ一つで、それも決まるのぢや。何とか、しなはれ』

『そないに、私ばかりを、責めなはつても、そりや無理や。何も、私ばかりが悪い、といふ次第では、ないのぢや。西郷はんが、行きなはつても、そないに、悪い事もないと、思ふたに依つて、私も、可からうといふたのや。今更らに、何とかしろ、と言やはつても、私には、工夫がない依つて、貴公が、考へて見て下はれ』

溫順な三條は、既う抛棄出して居るのだ。西郷から、閣議の請求を迫られ、岩倉からは、喧ましく叱言をいはれて、その煩はしさに、堪へないのであつた。

『板垣と副島を、呼んで見やう、と思ふが、何うぢやらう』

『左樣……』

何の意味で、二人を呼ぶのか、それが解らないから、三條の返辭は、確乎しないのだ。

『西郷の意見が強いのも、畢竟は、此二人が、居るからぢや。之れを巧く抑へたら、西郷の覺悟も、幾分は弱くなると思ふ。免に角、貴公の名で、呼びに遣つたら、可からう』

『來て來れなはるぢやらうか、それに、板垣はんも、副島はんも、却々に、張い意見ぢやに依つて、假し呼んだ所でその早變はなからう』

『左樣でない。二人が來さへすれば、何とでもならう。涙脆いものは、話がし易い。』

岩倉の胸には、慥かに成算があるらしい。三條は、筆を走らせて、二人へ、手紙を認めた。使者は、越前堀と木挽町へ、馬を走らせた。三條は、顏色が良くない。岩倉は、何か知らぬが、笑壺に入つて、ニコ〳〵して居る。

話頭は一轉して、靑山の西郷邸には、鼻息の荒い、連中が集つて、酒宴の央ばである。すべてが、西郷の配下であるから、純な蹉跎詞で、話合つて居る間も、恰で喧嘩のやうな騷ぎで、調子の高い事は、素晴しいものだ。後れ走に、はいつて來たものが、座に就くや否、一調子張り上げて、と、いふたのを聞いて、すぐそれに應ずるものがあつた。

『明日な、彌々決まるのぢやが、岩倉どんの邸な、却々混雜でごわすよ』

『何ぎや騷いでも、致方な無か思ふが、岩倉どンな、何を騷ぎ居るのぢや』

『イヤ、板垣と副島さんな、岩倉どんの邸へ、はいり居つたからのう』

之れまで、默つて居た、西郷は、何を思ひ出したのか、不意と、立ち上つた。

『熊吉ッ』

『ハイ』

『己どんな、鳥渡出るからな』
『那邊へ……』
『那邊でも、可か』
一同に會釋して、戸外へ出る。送つて行かう、といふものが、あるのを斷つて、只だ一人で、遣つて來たのが、岩倉の邸であつた。時計は、夜の十一時が、鳴つたばかりだ。

五

板垣も、副島も、律義眞方な人であつたから、餘り議論の、融通は利かなかつた、併し、理窟は、却々言ふけれど人情には、極く脆い質である。それを、巧く操縱て、泣き落しにかけやう、とするのが、岩倉の考へであつた。この二人を、抑へて仕舞へば、西郷の兩翼が、無くなつたも同じ事だ。その上で、西郷は、何とでもなる、と、岩倉は、要を括つて居るのだ。

左樣いふ魂膽のある、といふ事は、更に知らないから、二人は、三條の手紙を見て、
『之れは岩倉派が讓歩して、この問題の解決を、つけるについての、相談であらう』
と、岩倉の立場が、頗る苦しい事も、知つて居るし、且は、自分の正直から割出して、都合のよい、想像を一乍ら岩倉邸へ、遣つて來た。先づ、岩倉からの話を聞く、と、案外千萬にも、非征韓の意見を述べて、西郷を渡韓せしむる事は、飽迄も不可である、といふて、說きつけやう、とするのであつた。板垣は、稀や色を變へて、膝を進めた。
『我等は、廟議に參列して、西郷大將が、渡韓大使たる事には、既に同意致したので御座る。貴下の御說の如きは、いくたびか繰返されて、各參議は、充分に討究致した末、もはや考慮すべき餘地はない、となつてから、決定したのであるから、今更に、變更のいたしやうはない。殊に、斯かる重大なる事柄を、私邸に於て、御相談下さるは、我等も、

甚だ迷惑に存じまする』
『イヤ、御迷惑とは、萬々御察しするが、之れも、天下の御爲ぢやから……』
『しばらく御控へ下さい』
今迄は、默つて居たが、堪まり兼ねたものか、副島は、岩倉の詞を遮ぎり、襟を正して、ぢッと進んだ。
『この御相談は、平に御免蒙る。三條公も、之れに御控へぢやが、今更に、西郷大將の渡韓を、中止せしむ可き、辭柄御座りませぬ。渡韓の事は、既に決して居るのぢやから、只だ、貴下は、同意か不同意か、それを御極になれば善いのぢや。板垣さんが、言はれた通り、我等に於ては、再考の餘地が御座らぬ』
『其處が、相談ぢやよ。畢竟は、此際に於て、西郷を、殺すか殺さぬか、それが、相談の本文ぢや、朝鮮へ渡れば、西郷は、必ず殺される。西郷を、殺させた上に、猶ほ戰爭を爲にやならぬ。朝鮮の背後には、支那もあれば、魯西亞もある。再考の餘地は無い、と言はしやるが、決して左樣でない。充分に再考す可き事ぢや、と思ふ』
『西郷は、朝鮮へ行かずとも、死ぬのぢや』
『何と……』
『この大使派遣が止まれば、西郷は、生きては居るまい』
板垣の此一言には、流石の岩倉も、默つて仕舞つた。三條は、この押問答を、聞いて居るばかりである。
折柄、廊下に、はげしい、足音がしたので、雙方ともに、口を噤て仕舞つた。
『ハッ……申上げます』
『何事か』
『西郷樣が、見えました』
『エッ』

『既う之れへ、御通りで御座ります』

一同が、廊下の方を見ると、果然、西郷が、立つて居た。

『岩倉さん……』

凜とした聲は、座敷に響いた。滿面、朱を灑いで、呼吸も、はづむで居る。

『貴君、何を爲さるか。天下の大事な、公明正大を要する、といふ事を、知りなはらんか。事の善惡な、廟議で決したら可か、夜半ひそかに、私邸の會議な、男子の本領で御座るまい』

岩倉も、ギューと參つた。兩參議は、冷然として、岩倉の擧動を、視詰めて居る。三條公の顏には、不安の色が、現はれて居た。

折角に苦心した、岩倉の計畫も、終に之れで破れた。板垣、副島は、西郷と共に、岩倉邸を辭して、西郷邸に來た。

夜が明ければ十四日、即ち閣議の當日である。西郷派の參議は、早朝から出頭して、岩倉派の參朝を、待ち受けた。

午前十一時になると、一同が揃つた。但し、木戸孝允は、此日も、病氣缺勤の、届けを出してあつた。

大久保の辭職と三條相國の卒倒

一

三條は、太政大臣であるから、今日で謂ふ、議長の地位に在るのだ。今日は、木戸を除くの外、珍らしく一同が、椅子に着いた。三條から、朝鮮問題の經過と、大使派遣の、議決に關する、大體の報告があつた。岩倉は、靜かに立上つて。

『大使派遣の事は、實に容易ならぬ儀でありますから、尙ほ御熟考を、煩はし度い。朝鮮政府が、我政府に對する、無禮の仕向は、言語に絕えて居る。從つて、此場合に、大使を派遣すれば、如何なる亂暴を、加ふるやも計られぬ。左樣の場合になれば、直にも開戰に相成らう。大使を派遣致すには、何時にても、開戰するの覺悟が、無くてはならぬのぢや。之れは由々敷大事である。一歩を誤れば、國の興廢にも、關する事ぢや。我等は、容易に御同意は出來ぬ。殊に、支那や魯西亞も、地續きの關係から、いざ開戰となれば、必ず故障は起るに、定まつて居る。之れに對する、相當の覺悟もなければ、迂濶と、朝鮮へ、手を出す事は、なるまい。我國の現狀に照して、左樣な無謀は、出來ぬ筈ぢや。それよりも、內治の改良に努むるが、却て國の利益ぢや、と思ふ。兎に角、大使派遣に、同意は出來ませぬ』

京都訛の優しいうちにも、何となく針を含んで、岩倉一流の言葉遣ひだ。之れまでに斷言には、充分の覺悟はあるのだらうが、當の相手が、西郷であるのに、之れ位ゐに論ずるものは、岩倉の外には、あるまい。西郷は、苦い顏を

仕て、起上つた。

『この事な、八月十七日の廟議に於て、既に決して居る事ぢや。最う議論な、御無用でごわさう』

『西郷さんの、言はしやる事は、甚だ其意を得ぬ。若し議論が無用なら、今日の廟議を何故開かれたのぢや』

『そや、三條さんの御考へぢや。己どんな、其必要は無か思ふ』

大久保は、岩倉に代つて、椅子を離れた。

『我國内の事が、一向に整ふて居らぬ。外國へ對しても、赤面の至りぢや。朝鮮の交渉な、何れ時機も御座らうから……』

『イヤ、今が、其時機ぢや』

『併し、今が今之れも爲んきやならぬ、といふ次第な無か思ふ。それに、己どん等の不在中に、そぎや、決定をしなはつても、己どん等は、不承知でごわす』

『大久保どん、そや本氣で言はしやるか』

利通は、默つて居た。

『貴公等の、不在中に決定たのが不服と言はしやるのか、己どんも、參議でごわす。貴公等が居らんから、と言ふて、國の大事な、抛棄ては置けませぬ。己どんな、政府の門番ではごわへん。貴公等が居らんにもせい、留守の參議さんな集つて、斯く決定たに、何の惡か事がごわすか。況して、太政大臣の三條さんな、そいを、可か言はしやつたのでは、ごわへんか』

三條は、頭を下げて仕舞つた。岩倉は、ヂロリと、大久保の顏を見る。利通は、再び起上つた。

『己どん等の不在中に、大事件な、決定ぬ約束が、ごわす』

『誰と……』

『留守の參議さんとでごわす』

『己どんな、知らぬ事ぢや。貴公等が、そぎや事な言はしやつたのは、聞き申したが、己どんな、承知は爲ぬ事ぢや』

『そや。今更に卑怯で、ごわす』

『默まんなはれ、誰れが卑怯か』

西郷は、憤然として、卓子を打つた。流石に、大久保も眼を外らせた。一座は水を撒つたやう、になつて、只だ西郷の怒聲のみ、響くばかりであつた。

最初から、何一つ言はぬ、大隈が、づッと、起ち上つた。一同の視線は、大隈の顏に注がれた。大隈は、靜かに口を開いて、

『三條公に、願ひ上げる』

大隈は、果して何事を言はん、とするのか、三條公は、顏を上げて、大隈を見詰めた。

二

後年の大隈伯は、立派な政治家として、或一部の人から、尊敬は受けたが、當時の大隈參議なるものは、眞に伴食參議の、一人であつた。大隈伯昔日譚といふ、書物を見る、と、維新の大業は、殆んど其一半を、伯の手に、待つた如くなつて居るが、それは、賣藥の廣告と同じく、餘り信用になつたものではない。大隈が中央政府の人と、なつたのは、明治二年からの事で、その以前の大勢には、何等の關係も、有つて居なかつたのだ。從て、大隈を、維新の元勳とは、云へない譯である。鍋島の家臣で、早く維新前に、京都へ入つて、倒幕の働きをしたものは、江藤新平が、只ッた一人であつた。大木喬任が出かけたのも、江藤よりは遲い。それといふのも、つまりは、鍋島侯が、伏見鳥羽の衝突までは、巧妙に、立廻つて居て、容易に去就を、極めなかつた爲である。

大隈が、八太郎と稱して、長崎に居た時代には、面白く泳いで居たが、時世の變轉には、大した關係がなかつた。幸ひにして、薩長土肥閥の五瀧が、明治政府の基礎になつて、大隈も、大木も、其庇護を蒙つたのではないが、參議として、廟堂に、列なつては居た時には、更に勢力もなく、議論も、多く吐かなかつた。大使派遣論が起つても、大隈は、可否の議論を、爲ずに居た。派遣論が、決定した時でさへ、さらに反對の意見は、述べて居なかつた。然るに、岩倉大使の一行が歸朝してから、態度を一變して、大使派遣論に、反對の態度を、明かにしたのである。それ迄は、全く首尾兩端を持して、灰色の立場に居たのだ。

「大隈は、宛でフラフのやうぢや」

と、或參議が、嘲けつたのが因で、フラフ參議の名が、高くなつた位ゐである。

大隈が、西郷と大久保が、爭ふて居る場合に、三條公へ、何か言はう、としたのであるから、何事を言ふのかと、一同が之れを注視したのも、無理はなかつた。

「貴公、何事や」

「自分は、横濱の外國人から、呼ばれて居ります故、これにて、退席致します」

「ハア、左樣か」

三條は、ケロンとして居る。大隈は會釋して、既に椅子を離れた。

「大隈さん、待ちなはい」

西郷は、斯う云ふて、大隈の方を向いた。大隈は立ちながら、

「何か御用ですかな」

「貴公、何處へ、行きなはる」

「横濱へ……」

「何しに行きなはる」

「外國人から、呼ばれて居りますので……」

「そや、何の用事で、ごわすか」

「夜會があるので、招待を爲れて……」

「默まんなはい」

「ハッ」

「貴公は、參議ぢや無か。毛唐人の馳走酒が何うあるか、國の大事な評議して居るのぢや。中座するとは、何事でごわす。控へなはい。馬鹿なッ」

その平生から見て、西郷が怒罵くのは珍らしい事であつた。殊に、斯くも、口汚なく罵つたのは、恐らく之れが終り初物であらう。

大隈は、此大喝に逢ふて、面目を失ひ、澁い顏をして、椅子に復したのは、實に不面目の至りであつた。時に、板垣が、徐ろに起上り、大久保に向つたので、一座の視線は、更に其方に轉じた。

「大久保參議に、質問いたし度い」

「はア、何事でごわすか」

「內治の改良と、いふ事は、岩倉公からも承はつたが、何ういふ風に改良する、とか、何時までに仕遂げる、とか、いふやうな事は、御說明もないやうぢやが、之れは、何うで御座る」

美事に、急所を突いたつもりで、板垣は、席に着いた。

三

非征韓派は、內治改良を、第一の主張として、大使派遣を拒むのであるが、さらに其改良の方法を、說明して居らぬ。從つて、それが幾何の、年月を要するか。その點については、少しも說明がないのだ。板垣は、之へ切込んで、質問を試みたのである。大久保は、椅子に倚つた儘、徐に口を開いた。

『內治の改良に就てな、既に內務省を、設ける計畫でごわすから、先づ其上の事でごわすよ』

『その設置までに、幾日位ゐの御見込ですか』

『まア、五十日位は、要るでごわせう』

『內務省を、設ける丈けに、五十日を要して、內治改良の着手は、それからとすれば、相當の結果を見る迄には、何れほど要る、御見込か』

『そりや、組織さへ出來れば、其後な、特別に、むづかしか事も無か思ふ』

『それが出來れば、大使派遣に同意せられるといふのですか』

大久保は、何とも答へなかつた。巧みに突込むで來られたから、大久保は、些か當惑の體であつた。副島は透さず、口を入れた。

『然らば、五十日餘と極めて置て、その後ちならば、大使派遣に同意する、と決したら、何うぢやらうか』

『そや、怪しからん』

突然叫んだが、西鄕である。板垣も、副島も、じつと、西鄕の顏を見る。他の參議も皆な、西鄕の方へ向いた。

『己どんな、そぎや延ばす事が出來ぬ。この事な行はれぬ、とあれば、己どんな、辭職る外なか』

西鄕の決心は、鐵石よりも堅く、この一事を以て、終生の仕事と、極めてあるらしい。內治改良を口實にして、一

日でも、延ばされる事は、實に西鄕の忍びざる所であつた。板垣と副島が、延期に同意するらしいから、之れは一大事と、見て取つて、自分の決意を示したのであつた。

種々と、押合つた末が、一日丈け、閣議を延ばす事になつた。西鄕は、之にも反對して、容易に肯かないのを、板垣が、漸く宥めて、終に納得させたので、その日は、先づ無事に退散した。

翌日の閣議には、岩倉も、夙くから出て來て、懇談に、時刻を移した。西鄕の決意が、餘りに堅いので、岩倉の主張は、幾分か弱くなつて來た。今度は、大久保が、怒り出して、岩倉と、衝突をして、遂々、歸つて仕舞つたので、閣議を開き得ず、解散した。

翌日が休みで、十七日は、大久保から、三條へ宛た、手紙が屆いた。それには、辭表さへ添へてあつたので、此日も、閣議は開く運にならなかつた。

小生事、無量の天恩を蒙り、殊に殿下の懇命に預る事、亦不淺、實に感佩する所に候、然るに、今日に至り、恐縮之至りに不堪候得共、奉職の目的難相立、辭表差出候、漫りに汚重職候儀、今更、汗顏至極に御座候間、今日のこと、何樣の御沙汰を拜承仕候ても、斷然決心仕候間、速かに御放免被下候樣、萬祈仕候、乍去、國事の事、度外に置き候心事、毛頭無御座候間、若し禍端相開き候はゞ、兵卒とも相成り、一死を以て、萬分の一を報じ度、微衷に付、其節に臨み候はゞ、御垂憐を賜り候樣、今より奉願置候。必ず進むで御依賴可申上候。誠惶誠惶

十月十七日

實美公閣下　利通

大久保が、此決心を示したのは、岩倉の弱氣を、見てからの事で、岩倉も、大久保へ對して、申譯けがない、と思つたが、十八日の閣議には、遠慮缺席を、爲す事になつた。その他のものも、從つて缺席する、といふ、狀態で、內

部の混雜は、非常なものであつた。

西郷は、十八日には、早朝から出頭して、岩倉派の出頭を、待ち受けた。三條は、悄然として、此日も出て居たが、氣の毒なほどに、苦悶の狀が、現はれて居た。

四

岩倉派の總缺席とあつては、閣議を開くのも、穩當でない。三條のやうな、溫和な人には、それを押切つて、開くことは無論、出來なかつたのだ。

『何うぢやらうか、今日は、岩倉公や、木戸はんも、見えん事ぢやから、もう一日丈け、延ばしては……』

『そや、不可ん』

西郷が一喝したので、三條は、默つて仕舞つた。他の參議は、勿論、何にも言はない。

『己どんな、岩倉さんの爲めに、參議を、勸めて居るのぢや無か、大使派遣の事な、既に決して居るのぢや。八月から今日まで、待ち居つたのは、同僚を重んじての、禮ぢや。この上の遠慮は、必要も無か、思ふ。今日に差迫つて居る、此事な眼前に控へて、缺席しちよるのは、そや、岩倉さんの氣儘ぢや。そぎや人に、遠慮は要らぬ。奏聞の手續きな爲れば、それで可か』

八月に決議してから、殆んど二ヶ月も待つた。それも、岩倉の歸朝を、待つ爲めであつた。岩倉が歸つてから、また揑くられて、今日も延期、明日も至難かしいで、引延ばされて居たのであるから、如何に西郷でも、癇癪の蟲が、承知しなかつただらう。殊に、內奏の手續までも、經て居る事件だ。三條の決斷一つで、直に決す可き事であるが、さて、其決斷の一事になる、と、三條の事であるから、些と至難しいのだ。西郷に、斯う言はれるのは、固より理の當然で、三條には、之れを押返して、乍併とは言へなかつた。

後藤象二郎は三條の窮狀を、見るに忍びず、西郷に向つて、

『まア、西郷さん。一日丈け待つて遣つたら、何うでせうか。その代り、三條さんも、明日は、一切の情實を拋つて、必ず奏聞の手續を執る、といふ約束で、待つて貰ふたら、何うぢやらうか』

三條は、渡りに舟の喜びであつた。

『そりや、後藤はんの言はしやる通り、この一日を、待つて下はるなら、我等は、岩倉公を、說きつける覺悟やに依つて、何うか、左樣して下はらんか』

『己どんな、御免ぢや』

宛で、哀訴するやうにして、三條が、頼んでも利かない。後藤は、猶ほ辭を盡して、西郷を說く。板垣や副島も、頻りに西郷を宥めて、僅かに一日を待て、といふのだ。此に於て、西郷も、終に屈した。

『そいぢや、何うでも可か』

『御承知下はつたか、それは何よりぢや』

三條の喜びは容易でないが、西郷は、苦り切つて居る。

『この事な行はれん時な、辭職るまでぢやからな』

閣議が散じてから、直ぐに三條は、岩倉の邸へ、遣つて來た。

『能くお尋ね下された』

『私も、今度といふ今度は、困つたよ』

『貴公が、求めた心配ぢや』

岩倉は、冷然として、少しも三條の苦勞を、察せぬ人のやうだ。之れから、三條は頻りに、岩倉を說いたが、岩倉

の決心が堅くして、默目と極まつたのが、もう夜半であつた。

事、此に至つては、止むを得ない。三條は、大決心を以て、この問題を、解決するの外はないのだ。岩倉邸を辭して、自邸へ、歸つて來た。家人に迎へられて、玄關の次室まで來る、と、

「うーむ」

と、苦しさうな呼吸をして、ばつたり倒れた。家來が、近寄つて見れば、顏色も普通でない。手足も冷えて、氷のやうだ。家人は、非常に狼狽して、醫者を迎へるやら、親戚へ急報るやら、大混亂のうちに、夜は明けた。幸ひにして、生氣づいたけれど、熱ほ高く、疲勞も酷い。一日や二日で、快方にはなるまい、と、醫者は、言ふた位ゐである。十八日の閣議は、之れが爲めに、開けぬ事になつた。

五

內閣の事情が、斯う紛糾したのでは、前途に、平和の曙光は、とても見られない、と、誰しも、さう思ふたに違ひない。

一切の行掛りを忘れて、互に讓合へ、といふても、此處に迄、押詰てしまつては、それも至難しい。いづれにしても、內閣の動搖を免れ得ざる、狀勢になつて來た。

三條が、岩倉へ送つた辭表と、それに添へた、書面が有る。辭表は、形式の極まつたものだから、之れを略す事にして書面の方丈けを、揭げる。

實美不肖の身を以て、夙に殊遇を蒙り、叨りに大任を負荷し、日夜職競、唯だ委托の重きに背かんことを、是れ懼れ、其職を辭せんと欲するもの幾回、然れども　聖上、宵肝、國家多事の秋、庶くは駑鈍を竭し、聊か鴻恩に酬ひ奉らんと、黽勉奉職、以て今日に至れり。而て、不幸、俄かに病を發し、殆んど國事を誤らんとするに至る。

是れ他なし、才短にして力微、其任に堪へざるの致す所也。苟も如　此、其職を瀆すこと能はざるは、上は聖明の德を累はし、下は萬民の望みに背く、其罪死して尙ほ餘りあり、實は恐懼慚愧の至りに不勝、因て速に職を解かんことを乞ふ。伏て望むらくは、閣下、實美が衷情を、憐み察し、以て叡聞に、達し玉はゞ、何の幸か之に加へん、と、頓首

この書面を讀めば、三條が、苦悶の半面は、歷々として、眼に見えるやうだ。

却說、西鄕以下の征韓派は、十八日、一同揃ふて、岩倉以下の、非征韓派を、待受けて居る、と、更に其姿を見せないのみならず、三條相國も出勤せぬので、之れは變だな、と、思つて居る所へ、三條は、昨夜、急病で卒倒した。當分は恢復すまい、といふ報告があつたので、西鄕等の驚きは、尋常でなかつた。事が、此處にまで運んで來た今日、三條に逃げられては、千日に刈つた茅を、一夜に燒いて仕舞ふも、同じ事だ。兎に角、何んな無理をしても、三條を引出すのが、第一の策とあつて、一同揃つて、三條邸へ、遣つて來た。

假病とのみ思つて、來て見る、と、案外にも、眞の病氣であるばかりか、非常の重體とあるので、また喫驚したが、今は手のつけやうもなく、少時は、成行に、任す外はない、となつた。

三條の病氣は、日に倍々酷くなつて、二十日には、畏れ多くも　陛下の御臨幸があつて、病氣御見舞といふので、三條邸の混雜は尋常ならず、閣議は、何時開けるのか、その見込みさへ、定かなくなつた。思へば、西鄕が、何としても待てぬ、といふたのを抑へて、一日を强ひて延ばさせた。それが因を爲して、此手違ひが起つたのである。返へす返へすも、征韓派の爲めには、實に殘念な事であつた。

然るに、此日を以つて、岩倉邸へ、勅使が參られた。その御沙汰といふのは、

「三條が病中、其方代つて、太政大臣の役を致せ」

と、いふのであつた。

思ひも寄らぬ、太政大臣の代理である。岩倉卿は喜んで、御請を致した。三條が、最初に、大使派遣に、同意して居た丈けに、岩倉も、何となく働きが鈍つた。けれど、之れからは、心の儘に行れるのであるから、岩倉は、申す迄もなく、同派の者の喜びは、此上もなかつた。

岩倉は、木戸の許へ、自身に出かけて、之れを說いた。木戸は歸朝後、病氣屆を差出して、引籠つた限り、更に出動せぬのであつたが、岩倉から、段々說かれて、大に憤起して遣る事になつたが、大隈、大木も、此に於て、公然、反對の運動を始めた。今日から、當時の事情を見て、如何にも怪しからぬ、と思ふのは、この二人である。岩倉等の歸朝までは、贊否を明かにしないで、歸朝になつてから始めて、その立場を、明かに爲る抔は、果して之れを、士人たるもの丶本領と、いふ事を得るであらうか。實に卑怯千萬の振舞といふ、可きである。

同時に、黑田、伊藤等の運動は、却々に効果が、あつたらしい。伊藤は、此時代から、小才を弄して、巧く立廻つて居たので、先輩には、調法がられて居た。黑田の反對は、單純なものであつた。只だ、西鄕先生を、朝鮮へ遣るのは、頗る危險であるから、大使派遣さへ否決させれば、それで可い、といふ迄の事である。

五參議の辭職と西鄕の歸國

一

西鄕以下の五參議は、十月二十日になつて、彌々、三條の病氣を、重體と知つて、兎に角、今後の方針を、定めて置く必要があるから、正院へ集まる事にした。之れに就ては、種々の議論もあつたが、結局は、「三條の恢復を待たず、上奏の手續きに及ばう。太政大臣が無いのだから、誰れでも代つて、申上げれば何でもない事だ」と、いふ事に定めた。所へ、岩倉が、太政大臣代理になつた、と判明つたので、五參議は、復た喫驚した。

「また、裏を掘かれたか、何うも、暗中の働きには及ばぬ」

「イヤ、副島さん、未だ〳〵ぢや」

「併し、板垣さん、此に至つては、如何とも致方はあるまい」

「岩倉が、太政大臣の代理になつても、それと之れとは、事柄が異ふからな」

副島と板垣が、論じ合ふて居る間、西鄕は、何も言はない。眼を閉ぢて、考へて居る。

「抽者の考へでは、御互に議論をして居ても、事は決せんのぢやから、兎に角、岩倉を訪ふて、上奏の手續を、爲せたら可からう。三條公の代りとあれば、それを致すのが役目ぢやから、豈夫、厭とも言へまい」

後藤は、手を拍つて、

「そりや可からう。それが、第一の手段ぢや。反對の岩倉に、執奏の手續きを爲せるのは、一段と面白いぞ」

副島も、板垣も、之に合槌を打つた。

「そりや妙ぢや。同意々々」

この上は、西郷が可い、とさへ言へば、それで決するのだ。

「何うですか、西郷さん、貴下の考へは……」

「うむ」

「貴下さへ可い、とあれば、之れから直ぐに、岩倉の邸へ押かけませう」

「そいぢや、左樣定めやう」

西郷が同意したから、さア行かう、となつて、岩倉邸へ、押かけて來た。

同じ佐賀藩士でも、大隈や大木とは違つて、江藤は、竹を割つたやうな人で、略だとか、策だとか、いふやうな事は、餘り好まなかつた。明治初年の司法卿として、慥に其適材と、いふばかりではなく、今日に至る迄之れ以上の、司法卿はあるまい。謀叛の爲めに、刑死した人とはいへ、一般の人が、江藤を、忘れて居るのは、甚だ怪しからぬ事だ。西郷は、謀叛の爲めに討死しても、其子孫は、聖代の恩澤に、浴して居る。銅像の如きものでも、之れが若し、故人の德を、彰はす方法だ、とすれば、江藤も、銅像にさる可き筈である。謀叛したのが善くない、とすれば、西郷も、それではないか。西郷の子孫が、聖代の恩澤に、浴して居るのに、江藤の子孫が、飢餓に苦んで居て、社會は、之れを顧りみない、といふ、不權衡の事を、公平な人は、どう見るか。櫻田門外の、司法省へ行く、と、大木の銅像がある。山田義顯のもある。けれども、江藤のはない。大隈は、生きて居るのに、銅像になつた。西郷と江藤と比べたら、その人物に、大小の別は、あるだらうが、一たびは、國家の柱石として、將た維新の功臣として、臺閣に列し

た、一人である以上、況して、司法卿としての功績は、星霜こそ僅少ではあつたが、大木や山田の、比ではない。順境に、疊の上で、死んだ人と、逆境に、刀の錆と、なつた人と、運不運にこそ、相違はあれ、人物としての對照に、それが、何の關係があらう。古人も謂ふた、功罪相償ふとは、斯る場合に、用ふ可き、格言であらう、と思ふ。要之佐賀出身の人に、情熱のある人が在つたなら、こんな馬鹿氣た事は、ないのだらうが。その人に、乏しい結果が、江藤を殺したのみならず、子孫までも冷遇されるのである。

二

岩倉は、既に覺悟を極めて居たらしい。衝突を恐れては、この問題は、とても解決が出來ない。一度は烈しい、衝突もして、問題の落着を決けてから、さらに調和の方法を、講ずるの外はない、と斯ういふ覺悟から、太政大臣の代理も、引受けたのであらう。

執事が、敷居越に、廊下へ手をついて、何か言ふて居る、岩倉は振返つて、

「何事ぢや」

「ハッ、西郷樣、御連中が見えました」

「ふふーむ、西郷さんの外は、誰々か」

「板垣樣も、江藤樣も、それから、副島、後藤の御二人で御座ります」

岩倉は、苦い笑ひを漏して、獨り首肯いた。

「可い、之れへ、御通し致せ」

「ハッ」

執事は、命を受けて、立去つた。やがて、五參議は、西郷を眞先に、やつて來た。

「之れは御揃ひで、能う見えられた。さア之れへ、ずッと……」

如才ない、挨拶に迎へられて、五人は、席へ着いた。岩倉は、調子も輕く、

『御揃で、何か御用でもあつてか』

「左樣、些と申上げ度い事が、ごわして、御伺ひ致したので、ごわす」

「ははア、そりや、何事で御座るか』

「朝鮮國へ派遣の、大使一條でごわすが、もはや議論も、あるめへ思ふに依つて、三條さんな御病氣ぢや、といふ以上、貴下から、奏聞な、手續を願ひ度が、一同相談の上で、來申したのぢや」

事も無げに、西郷は請求するが、執奏の手續は、西郷のいふ如く、無造作には出來ない。岩倉は少時、考へて居たが、

『そりや、折角の事ぢやが、相成りませぬ』

「何故な」

「未だ決定つては居らんのぢや」

「否、八月の會議で、決定つて居るのぢや」

「彼りや、貴下等が、隨意に決定られたので、我等は、頓と與かつて居らぬ。畢竟が、内定した丈けの事で、之れを以て、大政府の意見が、決定つたものとは、言へぬのぢや。明日にも、正院の會議を催して、それからの事ぢや」

「そや、怪しからん。已どん等が、隨意に決定た、とは、何ぎや次第で、ごわすか。三條さんな立會ふて、此席に居る五人、そいから、大隈も、大木も居つた。之れ丈けの參議な集つて、決定居つた事が、隨意とは、何ぎや次第で、ごわすれ」

「朝鮮と戰爭するほどの、大事件を、我等が、不在中に取極めたのぢやから、我等は、與り知らん事ぢや。貴下等ば

かりで、決定なはつたとて、それを以て、正院の決議として、執奏の手續きは、出來ませぬ」

「已どん等が、決定た事な、正院の決議で、は、ごわへんか」

「左樣、我等が、加はつて居らぬ」

「貴下等は、西洋へ行きなはつて、その時な居らんのぢや。正院な、貴下の領有ぢや、ごわへん。參議な、貴下の家臣で、ごわすか」

事は、漸く面倒に、なつて來た。西郷の語氣が、段々、荒くなつて來る。板垣は、西郷の言葉が、切れるのを待つて、

「鳥渡、一言申述べ度い。朝鮮と戰爭する事は、誰れも決定ては居らぬ。修交の爲めに、大使を送るといふのぢや。それは、我輩も、同意したに違ひない。大使の派出と、戰爭とは、話が違ふのぢや」

『板垣さんの仰せぢやが、その大使派出が、畢竟は、戰爭になるのぢや」

「そりや、誰れが開戰と、決めたのですか」

岩倉は、流石に、默して仕舞つた。

「其處まで、想像せられるのは、それこそ、貴下の御隨意で、我輩等は、與り知らぬ事ぢや。假りに開戰と決めて、何が恐ろしうて、貴下は、之れを拒まれるか。戰爭の事について、貴下は、何を知つて居られるか」

最前から、岩倉の態度や言語について、頗る不快の感を、抱いて居た。板垣は、美事に、岩倉を罵殺したのだ。

三

岩倉も、板垣の浴びせた、冷嘲には、さッと、顏の色の赤くなるほど、癇癪は、逆上げて來たが、其處は、横着者の岩倉丈けあつて、直ぐに氣を轉へて、何喰はぬ顏をして、那邊を、風が吹くか、といッた調子で、平然して居た。

議論は諄々ないが、理義を見ることに遠いのは、後藤象二郎であつた。何事も、大摑みに引括つて、運びを急ぐのが、此人の流儀だ。何となく、大きい所があつて、愉快な人である。曾ては、自分を殺さうと、謀つた。土居卓造を說きつけて、味方として、娘の婿に迎へた。この土居が、大江卓の事だ。明治十年の、陸奥や林有造の謀叛に、自分を、政府へ賣込んで、危く捕られやう、としたほどの、災難を受けながらも、探偵と承知で、林直庸を、平然して、使つて居たり、または、自分の從兄たる、吉田東洋を、殺した仲間の、河野敏鎌を救ふて、位地を得せしめたり、斯うした奇行の多かつた、後藤は、兎に角、普通の人間ではない。

西郷と板垣の、議論を聞いて、岩倉が苦む態を、見て居たが、

「議論の可否は、岩倉公も、御承知なのぢやから、今ま此席で、强ひて返答を迫つても、至難かしいぢらうから、猶う一晩、考へて下さる事にして、明日は相違なく、會議を開いて、この事を、決定て仕舞つたら、何うぢやらう。我等が、議決た事は、無論、正院の議と、認めて差支へは、ないのぢやが、それを悪い、といふものの意見も、一概に排尽ける事も、可くあるまいから、明日の會議に於て、正々堂々と論戰して、その決定つた所を、奏聞に及んだら、何うぢやらう。私邸で決定る事もなるまいから……」

後藤は、岩倉の決心が、堅いのを見て、此席に於て、爭ふも無益と、斯う考へたので、切上げをつけやう、といふのだ。之れには、副島も、同意であつた。

「後藤さんが、言はれる通りぢや。此席で、互ひに爭ふた所で、何の甲斐もない。折合がつかぬものと、なつた以上は、正式の會議に、かける外は御座るまい」

板垣、江藤も、之れには不同意がなかつた。西郷は、只だ默つて居る。岩倉も、澁い顏を仕て、ヂロリ〳〵と、一座を見廻はして居た。

翌日は、早朝から揃つて、出頭した。岩倉派も、今日は缺員なく、皆な出頭したので、會議の開ける前から、何となく不安の色は、兩派の人の顏に、現はれて居た。時刻は來て、會議は開かれた。三條太國が、着く可き椅子に、今日は、岩倉が、着いて居る。西郷派の人々は、不快らしい容子で、熟と岩倉の顏を、見詰めて居た。

「島渡御斷りする。三條公は、御承知の通りの大病で、近く出席は至難からう、との事ぢやから、不肖が、勅命に依つて、代理を務むるゆゑ、御一同に於ても、左樣御承知下され」

勅命に依つて、務むる代理に、誰れとして、異論のある可き筈はない。皆な點頭いて、其代理を認めた。大久保參議は、席を離れて、意見を、述べ始めた。

「朝鮮へ、大使を派遣する、といふ事は、早晩、必要には違ひないが、直に之れを行ふのは、甚だ面白くない、と思ふ。事に、西郷大將が、自ら之れに當る、といふのは、猶更ら不可である。朝鮮國の今日の狀態が、常軌を逸して居るのぢやから、大使を派遣したれば、とて、平穩に談判が、終るものとは思へぬ。それ故に、大使を派遣するのは、開戰の通知を、爲るやうなものぢや。況して、西郷大將の如き、官位の高き人が行かれて、萬一の變でもあつては、それこそ、愈々、開戰の外はあるまい。已どんな、決して朝鮮を恐れるものではないが、我國の現狀から考へて、今日の場合、それ迄にして、開戰する事は、頗る憂慮に堪へぬ次第ぢや、と存ずる。之れより其理由を、一通り申述ぶるに依つて、御聞取りを願ひ度い」

今日は、大久保も、非常な覺悟を有つて、大に論戰を爲るつもりで、出頭したのだ。諄々として、說き出す容子に少しの澁滯もないので、覺悟のほどが、略ぼ推察される。

四

大久保は、更に襟を整して、熟と、西郷の顏を見た。西郷も、大久保を、睨んで居る。

『德川幕府を倒して、明治政府となつてから、未だ幾年にもならず、內政上の事さへ、一向に整つて居らぬ。之れから改正す可き事は、澤山にあるのぢや。從つて、それに要する金も、充分に無くてはならぬ。洋行を致して、段々、世界の現狀も視たが、實に恥かしい位に、我邦の內治の事は、整つて居らぬのぢや。此有樣では、條約改正も至難しい。西洋諸國と、萬一の事が起つても、殆んど手の出しやうがなからう。內治が、整ふて居れば、何とか工夫の致しやうもあるが、今日の有樣では、如何なる事が起きても、西洋諸國には、及ばぬ事になる。

この場合に、好んで朝鮮に、事を構へる事は、甚だ宜しくない、と思ふのぢや。朝鮮の背後には、魯西亞も在れば支那も在る。朝鮮を討つ、といふ以上は、それ等の事も、考へて置かねばなるまい。さ、その點になると、我邦の實力が、充分であるか何うか。之れを以つて考へると、大使派遣は、恐る可きものと存ずる。朝鮮の事は、朝鮮一國で濟むものではない、といふのが、己どんの杞憂であるのぢや。

それから、西郷大將のやうな人が、大使となつて行かれるのは、殊に宜しくないのぢや。萬一の變があつたら、國家の損害は、容易な事では、ないのぢや。所謂、萬卒は得易きも、一將は得難しの諺もあつて、西郷大將派遣の事はいづれにしても、不可と思ふ。

この件については、種々の事情も、纏綿つて居て、隨分、面倒な事ではあるが、そりや、西郷さんの考へ一つで、何とでもならうから何卒、猶う一度、考へ直して、貰ひ度いものぢや。己どんな、偏へに西郷さんに、希望する」

平生は、極めて寡默の、大久保も、この日ばかりは、長々と意見を吐いた。木戸は續いて、立ち上つたが。

「大久保參議の、申された通り、我等に於ても、西郷大將の御心は、充分に御察しするが、この際に限り、國家の爲めぢやから、是非、朝鮮へ行く事は、斷念して戴き度い。切に希望いたす」

と、頻りに情に訴へて、西郷を、口說落さう、と爲るのだ。

之れ迄は、餘り多く辯じなかつた江藤が、スツと立つた。

「岩倉公に、御伺ひ致し度い」

「何事で御座る」

「閣下は、三條相國の、御代理と承はつたが、それに相違ないのですか」

岩倉は、微笑を漏した。

「左樣、御尋ねの通り」

「然らば、大使派遣の議を、何と爲られる覺悟か、それを聞き度い」

「大使派遣は可くない、と思ふに依つて、再議にかけるのぢや」

「誰れの命で……」

疊みかける、江藤の質問には、流石の岩倉も、鳥渡行詰つた。

「誰れの命でもない、私の考へからぢや」

「そりや不都合ではあるまいか」

「何故か」

「閣下は、三條公の代理ぢや。と、自らも仰せられた御本人の三條公は、大使派遣に、同意せられて居るのぢや。代理といふものは、本人に代つて、本人の望みを遂げるものであつて、本人を離れて、代理といふものは、ない筈ぢや。本人の三條公が、之れに同意せられた上は、その代理たる、閣下は、三條公の意見を行はせられたら、代理の役は可い事に、なるのぢや。自分の考へから、之れを再議に附する事は、越權の沙汰ぢや。閣下は、代理といふ事を、何と心得られる」

岩倉ほどの人も、之れには、ギューと參つたか、少焉は、默つて居た。江藤は、凄い顏をして、岩倉を、睨みつけて居る。

五

法律思想の、極めて幼稚な、明治初年の司法卿ではあつたが、今日の刑法の、基礎を造つた人丈けあつて、有繋に捉へる究所を、心得て居る。堂々たる議論で、代理の性質を說いて、ギユーツと、締付けてゆく所は、慥に此論爭中の、特色あるものであつた。斯ういふ理窟に對しては、岩倉も、直ぐに返答もなるまい、と思つて、西郷派の參議は岩倉の擧動に、注意して居ると、

「江藤參議の言はしやるのは、そりや無理ぢや。私は、左樣思はぬ」

「然らば、何と思はれるか」

「昨日の太政大臣は、何とあらうとも、今日は、私が、代理して居る以上、私の心一つぢや、人が異へば、意見も異うものぢやから、何うも止むを得ん事ぢや」

「イヤ、その代理は、三條公の代理であるから、三條公の意見と、同じでなければならぬ。假し、意見は異つても、それに從はねば、ならぬものぢや」

「私は、左樣はならぬ。私の思ふた通りに、行ふのぢや」

「それは、代理といふものでない」

「只だ　聖上の御信任さへあれば、代理は、務まるものぢや」

「今は、御信任の有無を、論じて居るのではない。代理となつて、代理の意味を知らず、他から說明を受けても、猶ほ解らぬとは、閣下の頑冥も、甚太しいではないか」

「何でも宜しい。私は、私の信ずる通り、行ふの外はない」

此に至つて、江藤は、憤然として、卓を打つた。

「不幸にして、我輩等は、斯かる人の下について、國事を議すのぢや、この上は、最早言ふ可き事も御座らぬ」

江藤が、席に着くと、西郷は、立ち上つた。

「此事な、三條公より、內奏に及んで、既に御沙汰の在つた事で、ごわすが、今ま之れを再議するは、聖意に背くの畏れもある。そや、何うぢやらうか」

岩倉も、此質問には、暫時苦んで、即答は出來なかつたが、軈て嚴乎として、重い口を開いた。

「たとへ　聖上の仰せと雖、不善と思ふた事は、强て諫奏しても、御止め申す覺悟ぢや。我等不肖ながら、輔弼の大任を受けて居る上は、飽迄も、聖德を損ふ如き事は、御止め申す迄ぢや」

一座は聞として、咳嗽一つするものがない。岩倉の、氣質を知るものは、充分の覺悟を以つて、この問題に接する以上、多少の無理も行ふであらう、とは、豫め期して居た事であるが、之れ迄の決心とは、誰れしも思はなかつた。殊に、勅命に對して、斯かる頑强な、主張をしやう、とは、西郷も、意外に感じた。

「そい迄な、御決心とある上は、已どんな、最早何も申さぬ。貴下の御隨意に仕なはれ、之れで御免蒙る」

この一言を殘して、西郷は、席を離れた。江藤は、怒氣髮を衝くの勢ひで、

「閣下は、實に怪しからん。如何に辯疏の辭に究すればとて、皇威を侵すが如き、言を吐かるゝとは、不臣の罪を、甘んずるの御覺悟か、我等は、閣下の如き人の下に、國事を議する事を好まぬ。之れにて退席仕る」

と、言放つた儘、之れも、西郷と同じく、退席して仕舞つた。大久保、木戸を始め、岩倉派の人々も、憂愁の色を現はして、何とか調停の策もがな、と思つたけれど、肝腎の岩倉が、平然して居るので、如何とも爲る事が、出來なかつた。

板垣と、副島は、西郷の蹴る跡から、逐ひかけて來て、兎に角、一時引留やう、としたが、西郷の決心は堅くて、何うにも致方がないので、之れも續いて、退席して仕舞つた。この閣議が、世に謂ふ、征韓論の大破裂なるものであ

る。極く公平に考へても、その曲は、岩倉の方にあるといへるだらう。

六

西郷參議以下の退席が、斯ういふ事情から、とすれば、必ず辭職するに違ひない。從つて、怖る可き爭鬪は、之れから起る事は、火を睹るよりも明かである。大久保、木戸の二人には、その懸念はあつたが、岩倉は、騎虎の勢ひ、今は、所信を貫くの外に、些しの遠慮もなかつた。翌日は、兩派が、主張する點を認めて、自分の意見も附して、奏聞に及んだ。之に對しての御沙汰は、大使派遣は、中止す可しとの事であつた。聖斷が、斯く決した上は、西郷以上の五參議も、安閑として、其職に寧んずる事がならぬ。即時、辭表を捧呈して、西郷は、姿を隱して仕舞つた。

然るに、辭職の事が、啻に五參議のみに止まらずして、岩倉派の處置に不平のある連中と、五參議に、心服して居るもの、それから、西郷と、密接の關係あるもの、文武兩官を通じて、辭表を捧呈するものは、踵を接するの有樣で政府の動搖は非常であつた。

今更めて辭職した、連中の氏名を、特に揭げて見る、と、五參議を別にして、その重立ちたるものは、左の通りである。

桐野利秋　篠原國幹　村田新八
池上四郎　永山弼一郎　別府晋介
淵邊高照　貴島清　邊見十郎太
阪元純照　樺山資綱　片岡健吉
池田應助　林有造　谷重喜
山田平左衛門　山地元治　武市熊吉

平尾喜壽　島本仲道　小倉處平

この外にも澤山あつた。近衛兵營の士官は、大概、辭職して仕舞つたので、一時は、兵卒ばかりになつて、指揮官が無い、といふ奇觀であつた。

これに、五參議の人氣が、非常にあつた所から、却て一般の同情は、辭職派に集つたので、政府も後始末については、非常の苦心をしたが、何分にも、政府の首腦に、なつて居たものが、多く退職したので、この儘に、猶幾日かを過せば、人心は、倍々動搖して、不平の徒が、之れを機會に、意外の變を起さんも難量く、曲り形にも、政府の組織を、新たに爲るの必要がある。之れを差當つての、急務と見たのから、忽ちに生れ代つて、新政府が出來た、その顏觸れは、

三條實美（大政大臣）　岩倉具視（右大臣）
木戸孝允（參議兼文部卿）　大久保利通（參議兼內務卿）
勝安房（參議兼海軍卿）　大隈重信（參議兼大藏卿）
寺島宗則（參議兼外務卿）　伊藤博文（參議兼工部卿）　山縣有朋（參議兼陸軍卿）
島津久光（左大臣兼內閣顧問）　黑田清隆（參議兼開拓使長官）　伊知地正治（參議兼左院議長）

以上十三人が、政府の首腦で、內閣は、此連中に依つて、開かれる事になつた。各省の次官は、何ういふ顏觸か、といふに、

鮫島尙信（外務大輔）　松方正義（大藏大輔）　西郷從道（陸軍大輔）
川村純義（海軍大輔）　田中不二麿（文部大輔）　山尾庸三（工部大輔）

佐々木高行（司法大輔）　杉孫七郎（宮内少輔）

今日で謂ふ、次官なるものであるが、この連名を見れば、政府者の苦心の狀は、眼前に浮んで來る。殊に、勝と島津を拔いて、閣臣の一人に、加へた杯は、實に不可思議の感が起る。時の人、之を稱して、七味内閣といひ、又は寄鍋政府ともいふた。

任命の月日には、多少の先後はあつたが、五參議去つて、後の政府は、兎に角、への字形に、出來上つた。之れで辭職派との權衡が、巧く執れた、豫想であつた。伊藤は、奔走建策の功に仍り、大隈、大木は、沈默阿附の甲斐あつて、大臣となつたのであるが、獨り從道が、兄の隆盛に背いて海軍大輔に、ふみ留まつたのは、情に離れて、理に從ふたのであらう。

七

王政維新の大仕事は、三人が揃ふて、美事に、成し遂げたが、圖らずも、朝鮮の問題に引つかゝつて、西郷は朝を去り、大久保と木戸が、政府へ居殘つた。去つてゆく西郷の心事は、沈痛を極めたであらうが、殘る二傑も、他人に知れない苦惱は、あつたに違ひない。

新内閣が組織される前、西郷は、靑山の自邸へ歸らず、その行衛を晦ましてしまつた。問題の爲めに別れたが、大久保の心は、どうも落着かぬ。木戸とても同じ事だ。西郷を惜む、といふ事情は、兩人の心に多少の相異はあつたらうが、之れを惜む、情に於ては、些しも違はない。

大久保は、西郷と、同じ町内に生れて、同じやうに育つて、終には、同じ政府に、臺閣の一員として、椅子を列ねて居たのだ。然るに、長州人と一緒になつて、西郷と、手を別つ、といふのは、大久保の情に於て、固より忍びなかつたらう。一時の行懸りとはいへ、何事かの方法を以つて、西郷の足を、留め度くも、思ふのであつた。木戸には、

それ迄に、深い情はあるまいが、西郷が、維新の際に於ける、功業と、天下の望みを、負ふて居る點、とを考へ、また、西郷を慕ふて居る、不平黨の事も、思ひ合せた。この儘に歸國させたら、假し、西郷が、如何に大人物であつて自分は、此事に、怨恨を有つ、といふやうな卑劣な心はない、としても、附隨ふ連中が、却々、超然つては居まい。畢竟は、天下に、禍亂の種子を、蒔くやうなものである。出來る事なら、今のうちに、西郷を、抑へて置き度い、といふ考へから、自然、大久保とも、相談の上、兩人して、西郷を說いて見よう、といふ事になつた。

然るに、西郷の居る所が更に分明らない。西郷は辭表を出す、と共に、何處へ行つたか、少しも分明らないのだ。兎に角、その居所を搜そうとなつて、種々に、探つて見たが、何うしても分明らなかつた。黑田清隆なら或は知つて居るだらう。黑田を招んで、之れを賴み込んだ。黑田の心は勿論のこと、西郷の復歸を、望んで居るのだから、喜んで引受けた。直ぐに奔走をはじめたが、更に分明らないので、今日は、靑山の西郷邸へ、遣つて來た。

西郷は、質素な生活をして、少しも邊幅を飾らなかつた。鳴谷町の米穀取引所の、直ぐ傍に、島津侯の邸があつたその門長家に、住んで居た事がある。廿八貫も在る大男が、二間しかない、小さな長家住は、頗る面白い。而かも、陸軍大將近衛都督兼參議といふ、大層な肩書を、持つて居る人の、住宅としては、餘りに疎末なものであつた。

八

西郷は、住宅についてのみ、質素であつたのではなく、衣食の如きも、それに準じて、極く疎末なものであつた。内閣へ、出る時でも、握飯を、竹皮へ包んだのを、持つて行つた。之れが爲めに、他の參議が、何時も困つて、

「何うです、西郷さん、此方の仲間入りは……餘り御馳走が無いやうですな」

と、臆面もなく、切出すものがある、と、西郷は、平然した顏で、

「己どんな、此方が可か。握飯でも、生命を維ぐに變りは、ごわへんよ」

此一言で、ギャフンとなつた。

百事が、此調子でゆく、西郷の住宅が、宏大でないのは當然である。不相應の爵位を受けて、眼も眩むばかりの、贅澤な家屋に往んで、やれ妾の、それ藝者のと、顰ぐものもあるが、少しは西郷の鼻糞でも、嘗めたら可からう。

黑田は、靑山へ來て、西郷の忠僕、熊吉に逢ふて、根掘り、葉掘り、段々、聞いて見る、と、兩國から、船に乘つて、那邊かへ行つた、との事であつた。それから前途は、那邊へ行つたか、熊吉にも、解らないのだ。

「そいから、前途は解らんのか」

「貴樣は歸宅れ、と仰しやるから、歸つて來たので、その前途な解りませぬ」

「ふふむ、那邊へ行かれたかな」

少焉、考へて居たが、

「解つた」

「解りましたか」

「解つた」

「那邊でごわすか」

「那邊でも可か、貴樣な、知らんでも可か」

熊吉が、聞ひかけるのを、叱りつけるやうにして、黑田は、獨り出て行つた。

慶應四年の春、彌々、征討軍が、江戸へ向ふ、といふ時に、軍用金がないので、何うにも始末がつかぬ。西郷は、三井の本家を說いて、軍用金を出させた。それが緣で、三井家と親しくなつて、江戸が東京と變り、大政府の基礎が堅まつて、西郷も、陸軍大將になつたので、三井家からは、時候の挨拶位には來る。向島に、同家の別莊があるので之れには時々、遊びに行く。それを、知つて居たのは、黑田、大山、それに弟の從道位るであつた。兩國から、船へ

乘つた、といふから、隅田川を遡つて、小梅の三井別莊と、はやくも睨んだのは、黑田なればこそだ。

宙を飛ぶやうにして、小梅の別莊の前まで來た、別莊の番人が、頻りに門前の、掃除をして居る。

「こらッ」

「オヤ、黑田樣ですか」

「西郷先生な、來て居られるかな」

「ハイ、只今、魚釣に出かけたやうでした。鳥渡申上げませうか」

黑田は、支關敷臺へ、腰を下して、手紙を認めた、宛名は木戸孝允である。之れを、番人に托して、急ぎ届けさせた。自分は、土堤へ出て、川中を見る、と、果然、釣舟の上に、大きな西郷が、乘つて居る。黑田は、小舟を借りて乘付けた。

西郷は、綸を垂れて、竿を持つた儘、泰然として、澁りつけの人形のやうだ。舟がグラついたので、振返へると黑田が、乘つて居る、西郷は、ニヤリと笑つて、また、舊の人形になつた。

「先生ッ」

西郷は、徐かに手を振つて、之れを制した。

「大きな聲を爲ると、魚が逃げるよ」

黑田は、默つて控へる。何時まで待つても、魚が釣れぬから、話が出來ない。黑田は、モヂ〳〵して居るばかりだ。所へ、黑田の報知に、馬上で急いで來たのが、木戸であつた。すぐに小舟を、漕ぎつけた。西郷の舟へ移つて。

「西郷さん」

「おう、木戸はんか」

この時、つうッと、綸を曳かれたので、西郷が、キユッと、竿を上げた。小さな魚が釣つて、ピン〳〵跳ねる。

「大久保からも、傳言がある。上陸つて下さらんか」

西郷は默つて、針にかゝつた、魚を引放した。ぱッと、川の中へ放したので、魚は、喜んで泳いでゆく。

「木戸はん、彼の魚が抑へられるぢやらうか、ハッハ、、、、、」

一語に喝破して、木戸を默させた。西郷は、矢張り偉い人である。

九

副島、江藤、板垣、後藤の四參議は、辭職の後も、頻りに憤慨して、事の不始末は、獨り岩倉の專横と、木戸や大久保の頑冥なばかりで、斯うなつたのではなく、退いて考ふれば、自分等にも、亦た罪はあるのだ。畢竟するに、政府の組織が、善くないからである。之れを機會に、何とかして、政府の組織を、一變させ度いものである、と、先づ政府の改造について、頻りに腐心して居るのであつたが、いづれ外國の政體を視て、それを可然く、折衷でも爲ぬ事にや、別に之れといふ、新案もないのであつた。この時分に、英吉利歸りのハイカラで、古澤滋と小室信夫が頻りに板垣や後藤の邸に、出入して居た。この二人の說明で、英吉利の、君民同治の政體が、最も我邦に、適當して居る、といふ事に決して、民選議院設立の建議が、始めて生れて來たのである。四參議の外に、東京府知事の由利公正も加はつて、茲に立憲政體の主張が、公然發表された。この連命に、西郷が、加はつて居らぬが、何ういふ次第か、といふに、板垣が。西郷を說いて、仲間入りを勸める、と、西郷の答へが、斯うであつた。

「立憲政體は、善良な政體ではあらうが、一篇の建議書に依つて、直に決しやう、とするのは考へものだ。一國の事は、議論ばかりで、巧く決くものではない。君等は、それで進んでゆくが可い。已れは、暫らく政府の行動を、見る事に爲る」

之れは、民選議院論に對する、西郷の意見であつた。

それから、愈々歸國する、といふので、板垣が、西郷を送つて、横濱の埠頭まで、行つた時、板垣は、西郷に對つて、

「之れで御別れすれば、當分は御目にも、かゝれまい。自然、御互ひの間に、離間中傷が、起るに違ひない。之れは御互に、注意を仕度い。また、鹿兒島と東京では、大分道程も、離れては居るが、今後も、出來得る限り、東西相應じて、事をしやう、と思ふ。それについては、充分の御考へも、聞いて置き度い」

と、謂ふたのだ。然るに、西郷は、

「それは、御尤の御相談ではあるが、已れは、中央に、念を斷つて居る。御互ひに聯絡を保たう、とすれば、離間も起り、中傷も始まるのぢやから、今後は、勝手の行動を、採つて進む事にしやう。何卒、已れが居る、と思はずに、君等は、隨意に進んで呉れ」

と答へて、終に歸國して仕舞つた。

されば、西郷と板垣は、全く別のものに、なつて仕舞つたのだ、十年の旗上げが、不意に起きたものでなく、長い間の、計畫から始まつたものと、假定して考へても、この生別をした、板垣が、西郷と死を共にせぬのは、固より當然の事であつて、對韓問題で提携したから、謀叛まで、一緒に爲せねばならぬ、といふ事情も、理窟もない譯だ。辭職後の二人について、多少の誤解が、世上に傳つて居るやうだから、特に之れ丈けの事を言ふて置く。

江藤の歸國についても、訛傳や想像が、頻りに行はれて居るから、簡單に、當時の實際を、述べて置かう。對韓問題が破れて、五參議の辭職が、はやくも、佐賀へ知れる、と、之れに熱心して居た、士族が、何としても、承知をしない。動もすれば、不穩の形勢があつて、警報は、副島、江藤の下にも來る。其處で、二人が相談の上、鎭撫の爲め、歸國する事になつた。之れを聞いて、板垣は、二人に逢ふて、

「この際、歸國するのは、薪を抱いて、火に投ずるやうな、ものであるから、見合はせたら可からう」

との旨を、懇々、話し込んだ。

『イヤ、左様でもあらうが、自分の故國であるから、見捨る事は出來ない。何うしても行かねばならぬ』

『然らば、一人丈け、歸つたら可からう。二人が、揃つて歸るのは、面白くない』

『それでは、一人にしやう』

相談は、之れで定まつて、江藤が、歸る事になつた。果して、板垣の言ふた通りで、江藤は歸國する、と、不平士族の犧牲と、なつて仕舞つた。

十

江藤の歸國については、未だ〳〵述べ度い事もあるが、略す事に爲る。

要之、板垣と江藤の間に、それ以上の話はなかつた。他日、江藤の、旗上げに際して、板垣が、之れに應じなかつた、といふ事を以て、板垣を責めるのは、その道を得たものでない、と思ふ。

却說、西郷の歸國に、話頭は返る。參議は辭したが、陸軍大將たる、西郷の歸國する、といふ事については、政府は、決して許さなかつた。殊に、御用滯京の命さへ、下つて居たのだ。それを、西郷が、屈出もせずに、歸國して仕舞つた。けれども、政府は、何と處分する事も、出來なかつた。西郷に對する、政府の態度は、實に齒痒位に、手緩かつたものだ。

鹿兒島へ歸つてから、千石馬場町に居つた。其後、上の園に轉じて、暫時は、閑散に、日を送つて居た。武村は、最初の辭職、歸國の際の住宅で、この時も、猶ほ其邸宅で在つたので、多くは武村に居たのである。

英雄は、無事に苦む、と言つても、亂を好む、とのみではない。西郷も、歸國してからは、定まつた仕事がないの

だから、無事に苦むのであつた。斯うして、何事も爲ずに居るので、種々の世評も起れば、政府の方でも、心配する事になる。何か仕事に、從いて居れば、一切の疑惑も、消えるであらう、と考へて、自分の仕事を見付け出しにかゝつた。

朝廷から、頂戴の、賞與祿が、二千石ある。辭職の時に、之れも御辭退申したが、御採用にならなかつた。維新の大業に、拔群の功勞があつて、下賜せられた賞與祿であるから、その參議たると否とには、關係がないのである。併し、西郷の、清い心から考へて、一旦辭退したものを、御採用がないから、といふて、それに甘んじて、空しく食つて居るのは、甚だ宜しくない事である。何か遣つて見よう、といふので、終に學校を興す事にした。城山の麓に、地を選んで、建築に着手る、と、未だ落成せぬうちに、生徒は、滿員になつた。入校ないものが、苦情を持込むので、止むを得ず、附近に分校を造つた。之れも前同樣、それからそれへと、擴つて、郡部の方へかけて、十三箇所の學校が出來た。之れが即ち私學校である。西郷の賞與祿は、全部を、之れに注ぎ込んで仕舞ふた。

學校の監督は、篠原國幹が引受けて、桐野利秋、村田新八の二人が、篠原の補助となり、青年を養成る事になつた。私學校の主義とか、精神とか、いふやうなものは、西郷が、當時、自ら認めて、學校へ張出したものを見れば、よく解る。

第一　道同じく義協ふを以て、暗に集合す、乃ち益す其理を研究し、道義に於ては一身を顧みず、必ず踐行す可し。

第二　王を尊び民を憫むは、學問の本旨たり、乃ち此理を究め、王事民義に於ては一意難に當り、必ず一同の義を立つ可し。

この二箇條が、私學校の本旨に、なつて居るのだ。尊王愛民は、誰れでも言ふが、實地になると至難しいのだ。之れを實行し得るように、生徒の心から、鍛へ上げたのが、即ち私學校であつた。個人に就ては、節義を貴び、廉恥を重んずるやうに、嚴重な教訓を與へた、今時の學校と比べたら、勿論、充分のものではなかつたらうが、その

代り、今時の學校にない、骨の在る、血の在る、人間の製造は、十二分に行つた。薄つぺらなハイカラは出なかつたが、日本全國を相手で、半歳の戰鬪を、續けた人間は出たのだ。

之れが却つて、政府方では、杞憂の原因にしたのだ。西郷が、人を集める、といふ事は、政府の恐れる處で、西郷は、それを行つて居るのだから、政府の方では、何となく、西南の天を眺めては、契らざる警戒を爲る。それが自然、双方の感情に、悪い結果を、齎したのである。

昭和五年四月十八日印刷
昭和五年四月二十二日發行

伊藤痴遊全集　第二卷

（第十四　配本）

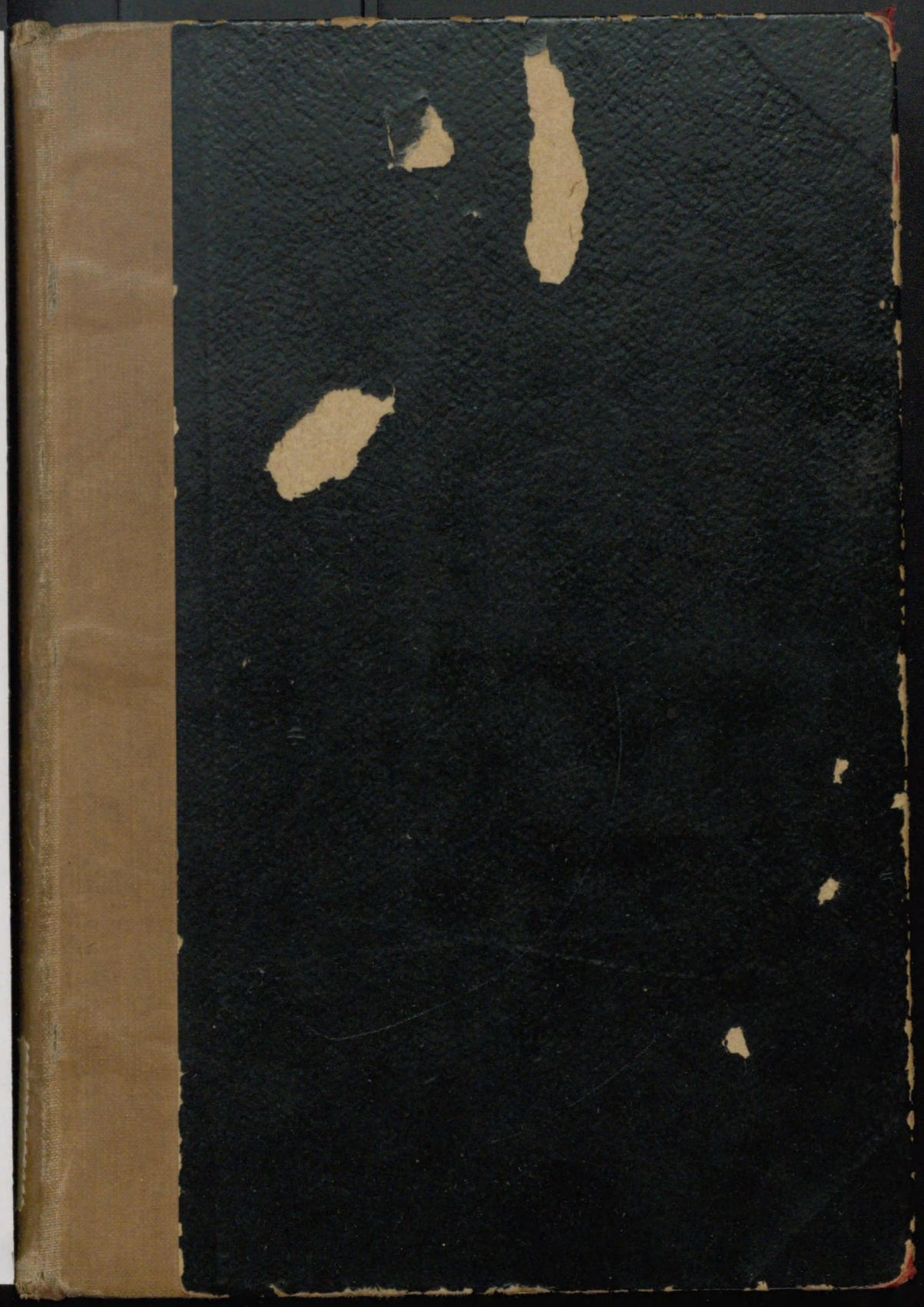
著者　伊藤仁太郎
發行者　下中彌三郎　東京市麹町區下六番町一〇
印刷者　川濤薫　東京市麹町區下六番町一〇

（非賣品）

發行所　東京市麹町區下六番町一〇　振替東京二九六三九番　株式會社平凡社　電話九段一三三六六四七五四番

共同印刷株式會社印行

560
12



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black